

水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)IV

2004年3月

水見市教育委員会

水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)IV

2004年3月

水見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くより海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

平成10年の日本海側最大の前方後方墳である柳田布尾山古墳発見は、大きなニュースとして市民に受け入れられ、改めて氷見地域の歴史に興味が示されるようになりました。

氷見市では市内の古墳の現況を把握するため、3カ年計画で丘陵地区の分布調査を実施しましたが、さらに調査を3カ年延長し、丘陵地区の全体の遺跡を把握することにいたしました。本書はその4年目の報告書であり、文化財保護・活用の一助となることを願っております。

終わりに、調査にあたりましてご指導・ご協力を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

氷見市教育委員会

例　　言

1 本書は、氷見市教育委員会が国庫補助事業として6カ年計画で実施している丘陵部遺跡詳細分布調査第4年目（平成15年度）の報告書である。

2 調査は富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導・協力を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3 調査参加者は次の通りである。

調査担当者：大野 究（氷見市教育委員会生涯学習課主査）

廣瀬直樹（氷見市教育委員会生涯学習課芸員）

調査補助員：の場茂晃（富山大学大学院人文科学研究科学生）・池田ひろ子・菟原雄大・黒田佳恵・小林高太・

佐藤浩志・高橋彰則・竹谷充生・本出晃久・柳谷史章・松森智彦・間野達・水谷圭吾・吉澤蘭
(以上、富山大学人文学部考古学研究室学生)

4 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、主査尾矢英一と廣瀬が事務を担当し、課長池田晃が総括した。

5 本書の編集・執筆は、大野・廣瀬が担当したほか、宮田進一氏・森沢佐歳氏から玉稿を賜った。文責は目次に明記した。

6 調査にあたって、以下の機関・個人の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

富山考古学会・氷見市史編さん室・氷見市立博物館

山本教幸（富山大学大学院人文科学研究科学生）・細田隆博・東良明・久慈英咲（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）・西井龍儀（氷見市史編さん委員会考古部会・富山考古学会）・宮田進一（氷見市史編さん委員会考古部会・（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）・森沢佐歳（元富山医科薬科大学）・橋

本正春（富山県埋蔵文化財センター）・岡本恭一（（財）石川県埋蔵文化財センター）・寺岡清（長坂地区）・小堀卓治（氷見市立博物館）・岩上節男（氷見市立博物館協議会委員）・正木実・南一雄（以上、西朴木地区）・南喜作・南惣一（以上、平沢地区）・高井秀一（戸津宮地区）

目 次

| | |
|---------------------------|----|
| はじめに（大野究） | 1 |
| 第1章 本年度調査地区の地勢と研究史（大野究） | 2 |
| 第2章 分布調査の成果（廣瀬直樹・大野究） | 4 |
| 第3章 測量調査の成果（大野究） | 15 |
| 付 章 西朴木地内出土の資料について（大野究） | 23 |
| 西朴木ドウガヤチ遺跡出土の焼骨について（森沢佐歲） | 29 |
| 西朴木フルヤチ遺跡出土の一括大量出土銭（宮田進一） | 34 |
| おわりに（大野究） | 46 |
| 参考文献 | 47 |

図 目 次

| | |
|-------------------------|----|
| 第1図 本年度の調査区と主要な遺跡 | 3 |
| 第2図 石動山登拝道周辺地図 | 5 |
| 第3図 平沢道周辺 | 6 |
| 第4図 大塙道周辺その1 | 7 |
| 第5図 大塙道周辺その2、八代仙道周辺 | 11 |
| 第6図 長坂道周辺 | 13 |
| 第7図 中波地区 | 13 |
| 第8図 平沢地内の石塔と臼川地内表採資料 | 14 |
| 第9図 千人塚測量図 | 16 |
| 第10図 平沢一里塚遺跡測量図 | 17 |
| 第11図 長坂落合中世墓測量図 | 19 |
| 第12図 遺物実測図 | 20 |
| 第13図 西朴木地区の地勢と遺跡位図 | 24 |
| 第14図 遺物実測図 | 25 |
| 第15図 西朴木地区周辺の中世墓と埋納銭出土地 | 27 |
| 第16図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(1) | 38 |
| 第17図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(2) | 39 |
| 第18図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(3) | 40 |
| 第19図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(4) | 41 |
| 第20図 正木実家に伝わる銭貨 | 42 |
| 第21図 西朴木フルヤチ遺跡出土銭貨の銭種構成 | 44 |

表 目 次

| | |
|------------------------|----|
| 表1 西朴木フルヤチ遺跡出土の銭貨計測一覧 | 42 |
| 表2 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭貨一覧 | 43 |
| 表3 西朴木フルヤチ遺跡出土銭貨の銭種構成 | 44 |
| 表4 西朴木フルヤチ遺跡出土銭貨のベストテン | 44 |
| 表5 富山県内出土の主な一括大量出土銭一覧 | 45 |

図 版 目 次

| | |
|----------------|--|
| 図版1 分布調査の成果(1) | |
| 図版2 分布調査の成果(2) | |
| 図版3 分布調査の成果(3) | |
| 図版4 採集遺物(1) | |
| 図版5 採集遺物(2) | |
| 図版6 出土人骨 | |

はじめに

氷見市では平成10年の柳田布尾山古墳の発見以後、氷見市史編さん委員会考古部会の調査によって多くの古墳が発見され、また一部の主要な古墳の測量調査が実施された。氷見市教育委員会では市史関連の調査の成果を元に、文化財保護の立場から市内の古墳の現況の把握と確認のため、丘陵地区の分布調査を平成12年度から3カ年計画で実施した。

3カ年の調査により、市内の古墳分布についてはかなり明らかにすることができたが、古墳よりもさらに奥まった場所に立地する山城や宗教関連遺跡などについては、まだまだ実態が十分に把握されていない状況である。

そこで氷見市では丘陵地区的分布調査をさらに3カ年延長し、古墳とは立地条件を異にする山城や宗教関連遺跡について、分布調査をおこなうことになった。

第四年目にあたる平成15年度は、市北部地区の主として宇波川・下田川流域を対象とし、踏査・測量・実測などの作業を行った。調査期間は平成15年10月1日から平成16年3月17日までである。



調査風景

第1章 本年度調査地区の地勢と研究史

氷見市は富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230m²、人口は約5万8千人である。

市域は南・西・北の三方が標高200～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は約20kmの海岸線をもつて富山湾に面している。市北半部は上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。市南半部は主として布勢水海が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

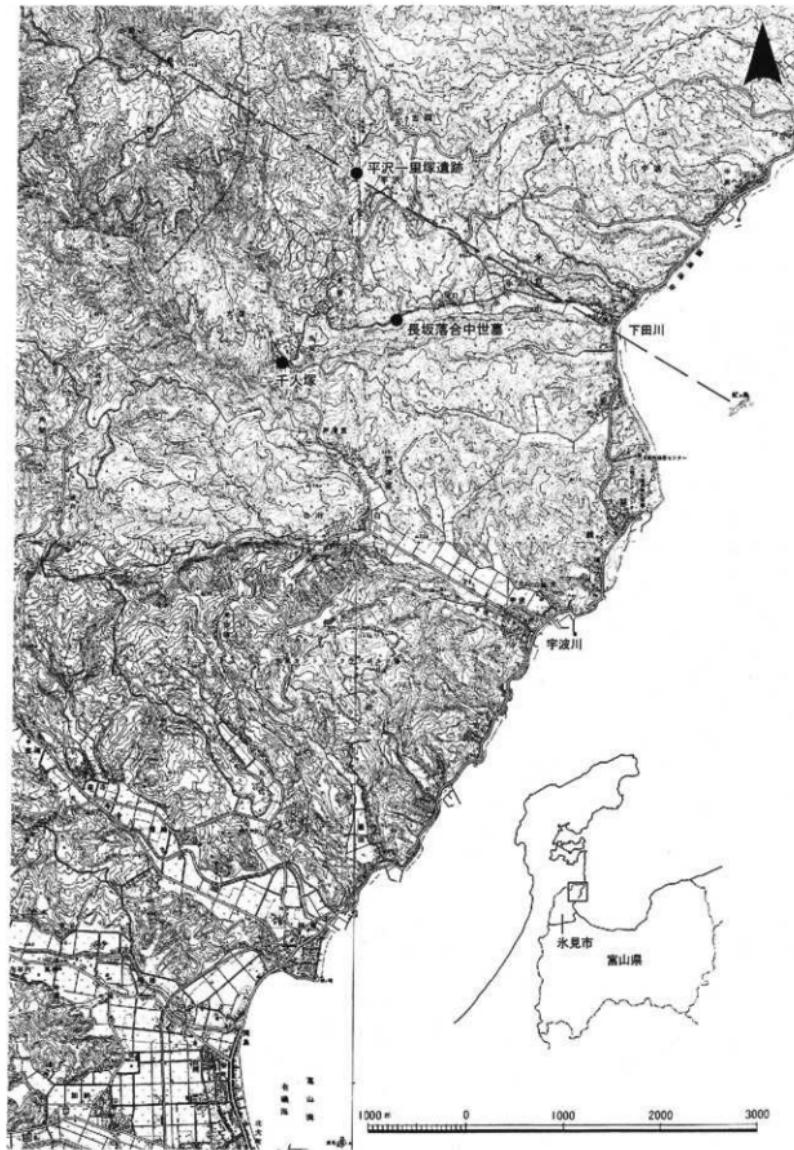
氷見市の北に接する石川県鹿島郡鹿島町には、中世・近世を通して山岳信仰の大拠点であった石動山石動寺（天平寺）が所在する。標高565mの山頂部にあたる石動山大御前は、周囲に比肩する山が無く、近辺の山麓さらには富山湾海上からも仰ぎ見ることができる。そして大御前の南斜面を中心に、数多くの寺坊が展開し、氷見市角間の通称八代仙には行場が設けられていた。その信仰圏は能登のみならず、加賀・越中・越後・佐渡・飛騨・信濃に広がっており、氷見からも幾筋かの登拝道が通じていた。従って氷見市北部地域には、石動山と関連する多くの文化財が残されている。

さて、石川県側の石動山は、昭和33年町指定、昭和36年県指定を経て、昭和53年に国指定史跡となり、地元鹿島町や石川県によって調査・整備が進められてきている。これに対して、富山県側の文化財については、系統だった調査が行われておらず、実態が十分に把握されていなかった。

このような状況の中で昭和56年、氷見市の宇波川上流地区にダム建設計画が持ち上がり、石川県側の史跡の一部が水没予定地に含まれることになった。石川県側との協議の中で、富山県側での調査の遅れが指摘されたのは当然のことである。そこで氷見市教育委員会は、ダム建設とはいったん切り離し、県教育委員会の協力を受けて、昭和58年度に石動山関連の文化財調査を実施した（氷見市教委1984）。この調査によって、市内の石動山関連文化財の様相がかなり明らかにされたのである。なお、ダム建設計画は平成11年に中止されている。

平成8年には石動山道（大窟道）が文化庁の「歴史の道百選」に選ばれ、平成12～13年には中田地区的道神社拝殿（旧石動山開山堂・県指定文化財）が、半解体修理により創建当時の姿によみがえった。このように石動山関連の文化財を見直し、保存・活用する動きがある一方で、昭和58年の調査から20年の年月が経過し、草木の間に埋もれたままの文化財も数多い。

氷見市北部地域を対象範囲とする今年度の分布調査では、これら石動山に関連する文化財のうち、特に埋蔵文化財が現在どのような状況になっているのかを確認するとともに、以前の調査で遺漏していたものの発見に努め、それらの記録を行った。



第1図 本年度の調査区と主要な遺跡

第2章 分布調査の成果

ア：平沢道

平沢：平沢地区は、大谷川をはさんで東と西の二つの集落に分かれる。集落周辺の水田や畠地には地点を特定できないが、「ミヨウドウジ」「ムクロジ」などの地名が残る。なお、「梵字塚」「経平」という地名があるという記述もあるため（氷見高校歴史クラブ1955）、地元の人に確認したが、現在は伝わっていないとのことであった。

平沢神社（第3図1）：境内の小堂内に石製の不動明王坐像が祀られている。不動尊本体と二層からなる台石の三つの石材からなり、上の台石には阿弥陀坐像と僧形坐像が、下の台石には^{シカモ}矜羯羅童子と制^{シカモ}吒迦童子の立像が半肉彫りされている。上市町にある大岩山日石寺磨崖仏の写しである。平沢道はこの平沢神社の裏手を通っているが、白川ジョウジバナ不動明王坐像とともに石動山登拝道のすぐ脇に石動山を背にして所在することから、石動山寺中に対する結界としての役割が指摘されている（氷見市博1985）。

ホウバヤシキ：平沢の集落に、ホウバヤシキ（法場屋敷か）と呼ばれる水田がある（第3図2）。今から百年ほど前、この場所で逆さにした大甕が出土し、中にはミイラ状の人骨があったという。人骨は空気に触れるとすぐに朽ち果ててしまったといい、甕も現存していない。その出土状況は長坂ソウト遺跡で確認された珠洲焼大甕を伏せて埋葬した土葬墓と類似しており、ホウバヤシキの例も、同様の中世土葬墓である可能性が考えられる。

平沢道の道標：平沢西側の集落から現在は農道となっている登拝道を登ると、平沢道と平地区へ向かう道が分岐する場所に出る（第3図3）。その地点右手の土手に切石の道標が置かれており、「左ハ石動山道 右ハ平邑道」と刻まれている。この平地区へ向かう道は千石池の下になっており、現在はたどれない。

平沢一里塚遺跡：道標を過ぎ、大きくU字に掘削された道を登りつめると、右手に一里塚と呼ばれる塚がある（第3図4）。これは平沢道に沿う尾根上の平坦面から先端を断ち切るようにして築かれた直径約6mのマウンドである。今回の調査で発見した遺跡であり、第3章で詳しく記述する。

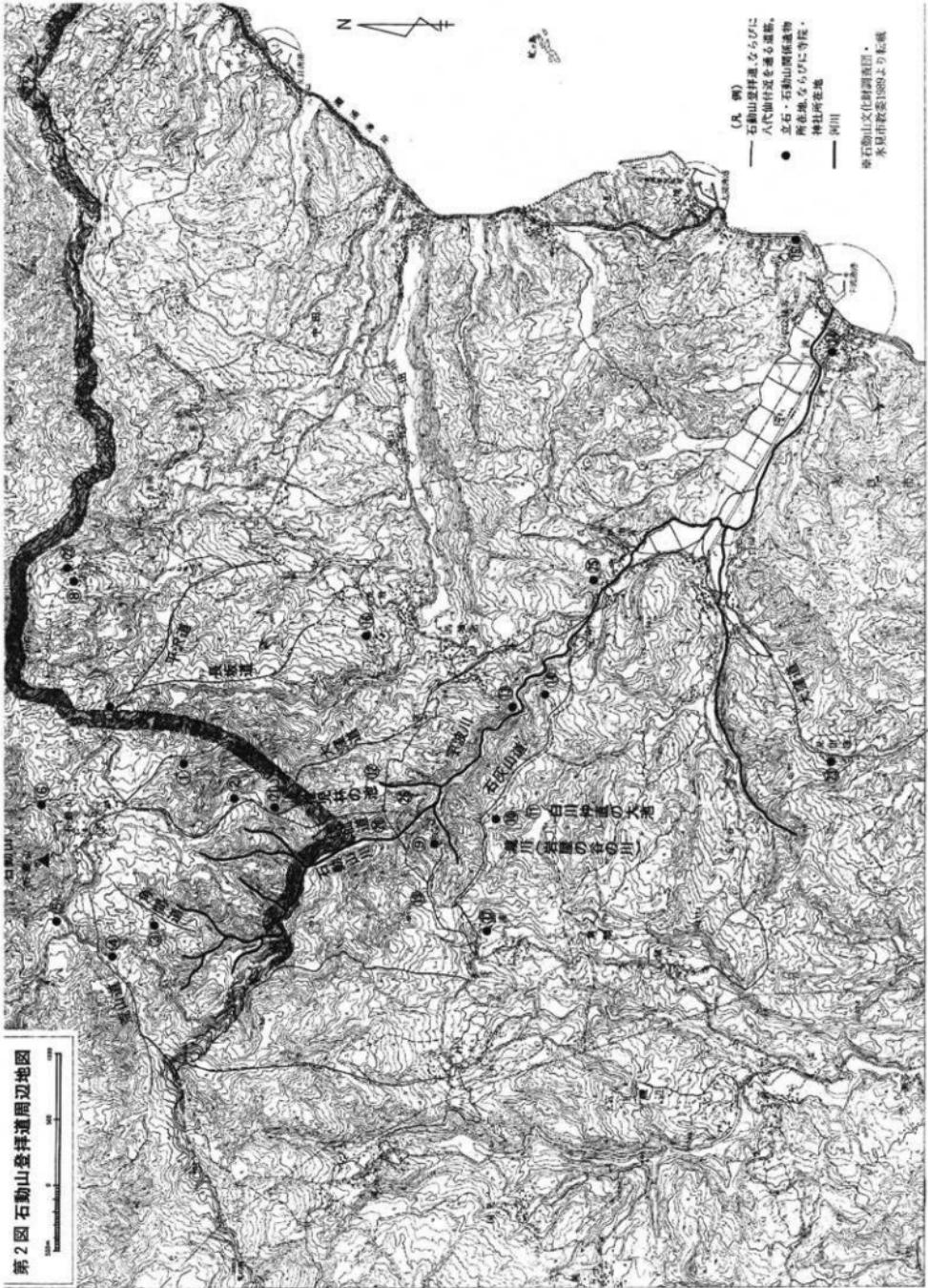
一里塚西下の立石：一里塚と平沢道を挟んで西側下にある水田脇に、「パン」塔1基と五輪塔陽刻板石塔婆2基が立っている（第3図5）。これらも今回の調査で初めて確認した石造物である。地元の人の話では、これら石造物はこの水田を開いたときに移したものとされる。水田周辺にはマウンド状の高まりが確認でき、一部に元の地形が残っている可能性がある。從って原位置からはさほど動いていないと思われる。ここは通称「フクロ」と呼ばれており、隣接するため池は「フクロの池」と呼ばれている。なお、ここからは前述の一里塚を望むことができる。

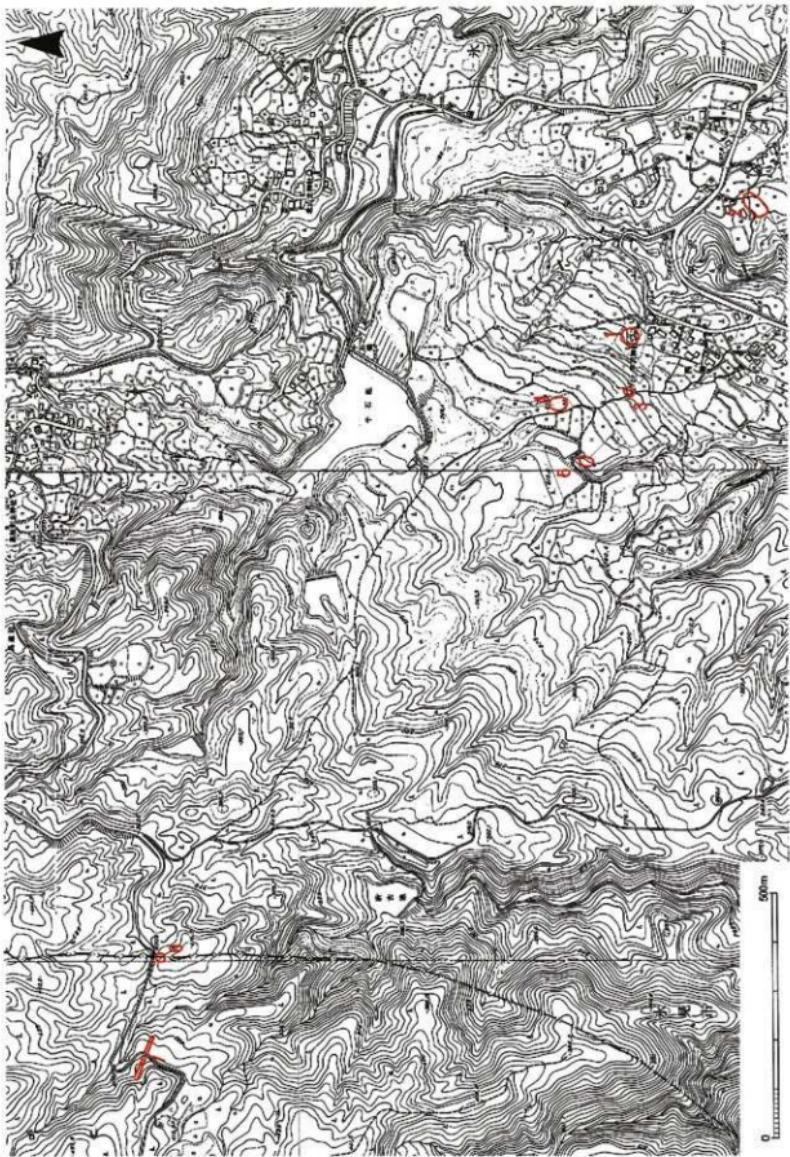
石造物の実測図と拓本を第8図に示した。

「パン」塔は、地上高110cm、最大厚36cmの自然石の平らな面を表面とし、その中央下寄りに直径42cmの月輪を線刻し、その中に雄渾だが著しく彫りが浅い梵字「パン」を刻む。月輪の下には蓮華座があるが、石材の形状に影響されてか左右非対称でやや稚拙な印象を受ける。

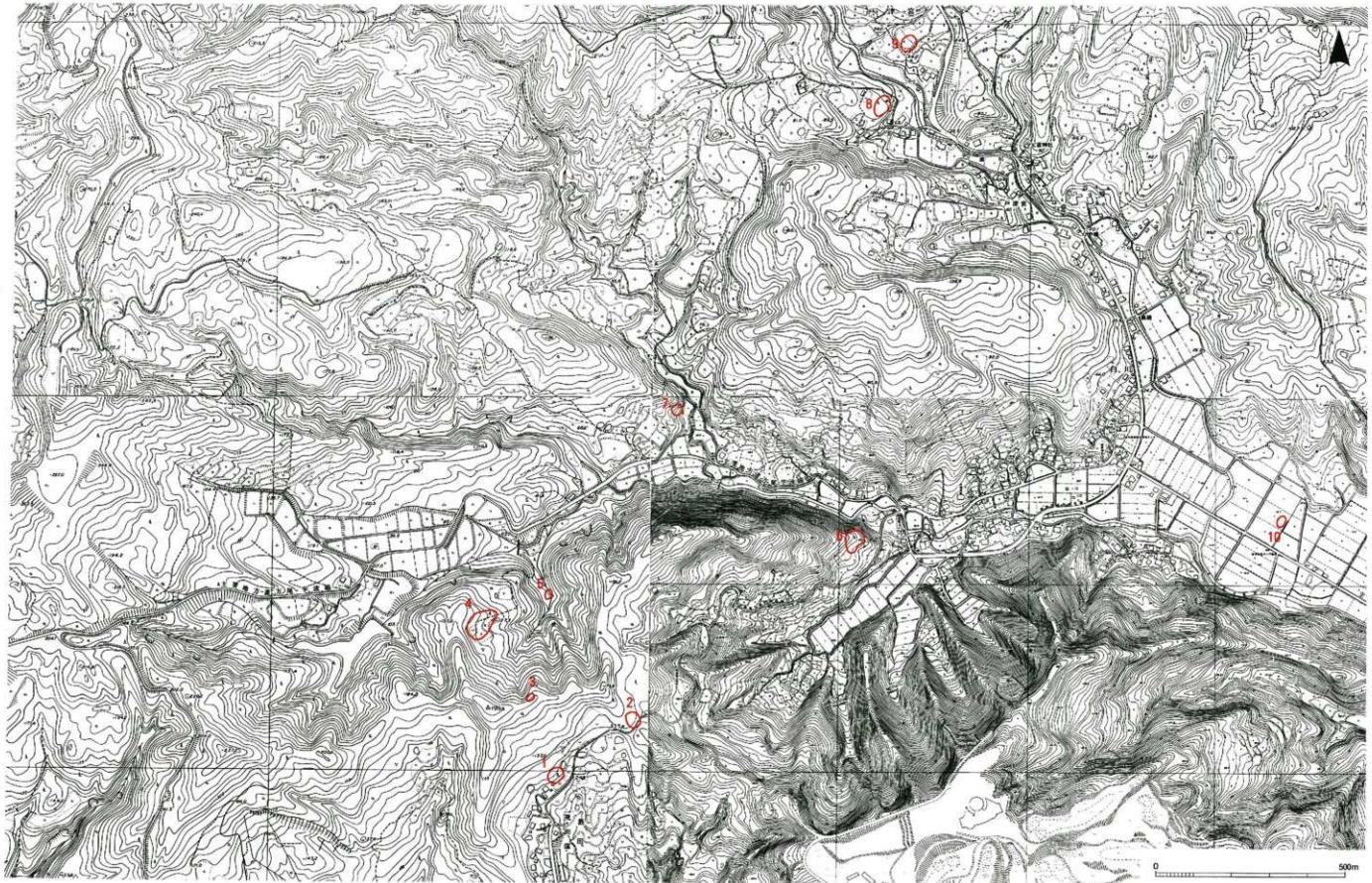
五輪塔陽刻板石塔婆その1は、下部を地中に埋め斜めに立てられており、地上高56cm、最大幅34cm、最大厚28.5cmを測る。頂部を圭首有額に整形した切石に、下ぶくれの水輪、低い地輪が特徴的な五輪

第2図 石動山登拝道周辺地図





第3図 平沢道周辺



第4図 大庄道周辺その1

塔图形を陽刻する。背面は不整形で自然面を残す。頂部の形状や五輪塔图形は、長坂光西寺墓地の天文三年銘の五輪塔陽刻板石塔婆とよく似た意匠である。周辺には50cm前後の自然石が集められているが、その中に五輪塔陽刻板石塔婆その2がある。その1と比べて小型で、高さ35cm、最大幅18.5cm、最大厚10cmを測る。こちらも主首有額でその1と同様の特徴を持つ五輪塔图形を陽刻しているが、背面は丸く整えられており、ノミで加工した痕跡が残っている。

天正の立石：平沢道と長坂道の合流する地点から100mほど登ったところに梵字「ア」を刻む立石がある（第3図6）。富山県と石川県の県境上に現状では新道を背後に南面して立つ。

血坂：地元の人の話では、石川県側に入って平沢道が林道で断ち切られるあたりを「血坂」と呼ぶそうである（第3図7）。これは鉄分の多い赤い粘土質土壤が流れで赤く見えることに由来するという。大窪道にも血坂と呼ばれる場所があるが、こちらは石動山合戦の折りに死傷者の血で坂の土が赤く染まつたのでこの名が付いたといわれている。平沢道は長坂道と合流する箇所で新道に切り替わっている。血坂を通って石動山中へ向かう道は荒れ果てており、現在では全く使われていない。

イ：長坂道

やまだの墓：長坂ソウト遺跡（第6図1）近くの通称「やまだの墓」墓地で珠洲焼、土師器の破片を表探し、五輪塔の残欠（空風輪、火輪、台座石）を確認した（第6図2）。この墓地には長坂ソウト遺跡の出土品が搬入されたと伝えられており、今回確認した遺物の全部又は一部がこれに相当する可能性がある。

長坂落合中世墓：長坂行入塚（第6図3）の南西、別所川に面し、市道で断ち切られた丘陵端部に立地する（第6図4）。今回の分布調査で新たに発見した遺跡である。測量調査の成果とともに、第3章で詳説する。

また、別所川を挟んで本遺跡の対岸南東方向の山中で2段の平坦面を確認した（第6図5）。上段の平坦面には川原石を組んだ約1.5×2mの方形の基壇上に小祠が建つ。下段の平坦面には上段の基壇に用いられているものと同様の川原石が集積されている。

ウ：大窪道

見田窪：見田窪は文政元年（1818）開墾に着手された土地であるが、阿尾から石動山に至る大窪道が通っており、所々に敷石が残っている。石の大きさは約40cm角、厚さ約15cmで、持ち去って個人用に使うと「その家に病人が出る」とか、「その家が死に絶える」といった言い伝えがある（水見市教委1984）。今回の調査では見田窪の村社周辺で大小4つの平坦面を確認したが、村社前面の平坦面には大窪道の敷石と同じ石材の石が集められている（第4図1）。道から持ち出された敷石の可能性がある。

鳥越峠：見田窪と白川との村境の標高145mの鳥越峠には石動山の一の鳥居があったといわれる（第4図2）。近辺にははがされた敷石が積み重ねられて放置されており、かつて堂坊が建てられていたような平坦面があるという（水見市教委1984）。周辺は植林のため造成されたと考えられる平坦面が多く、堂坊跡とみられる平坦面は今回の調査では確認できなかった。

鳥越峠北西側の丘陵では尾根のピークの一段下南側で長円形のマウンドを確認した（第4図3）。その尾根筋を西側にたどると三角点のある山頂にたどりつくが、山頂にひとつ、その北西側一段下にひとつ平坦面がある。今回の調査ではこれらが人為的な平坦面であるかどうかは判断することができなかつた。

マウンドのある地点から、逆に尾根沿いに東側に進むと、細い尾根に段をつけ、浅い掘切状に尾根を

断ち切った箇所がある。さらに北東に向かうと、尾根筋両側に計四箇所の平坦面が確認できる。こちらの平坦面もブッシュがひどく、人為的な削平の痕跡は確認することができなかった。そこから尾根を下っていくと、白川のオオサンジャに出る。

白川オオサンジャ：オオサンジャと呼ばれる場所には薬師堂と秋葉社があり、秋葉社の裏山の墓地に石造物が集められている（第4図6）。今回の調査では、薬師堂の周辺で近世越中瀬戸を探集した。採集した越中瀬戸は小皿の破片9点であり、このうち2点を図示した（第8図）。内面と外面一部に鉄軸を施し底部に回転糸切り痕を残す。

戸津宮中世墓：戸津宮中世墓として周知されている場所近辺の平坦面で、方形を意識して川原石を集めした土壙を確認した（第4図8）。遺物・石造物は確認していないが戸津宮中世墓と関連する可能性がある。

金剛堂と駒繩場：下戸津宮の流川の北岸にコンゴウドウ、コマツナギバ（ウマツナギバとも）と呼ばれる場所がある。コンゴウドウは現在籠蓋になっており、コマツナギバはコンゴウドウの下の細長い休耕田を指す（第4図9）。どちらも旧状は保っていない。

五十谷川南側の寺院伝承地：前述した鳥越峠北側丘陵の三角点からさらに北側に下ると、五十谷川に面した急崖の上に寺院伝承地がある（第4図4）。白川方面から向かうには、五十谷川を渡り、急崖を登る道をたどる。大小の平坦面が残るが、いずれも旧水田で、現在は植林されている。平坦面への上り道は五十谷川の支流に沿って分岐するが、そのまま川に沿って上流へ進むと小さな滝に行き当たる（第4図5）。

五社の宮：白川から五十谷へ至る道の北側、五十谷川の支流馬川に面した丘陵端部に2本の杉の木が立っており、その間に五社の宮という小さな祠が祀られている（第4図7）。

カンヤマ：地点は特定できないが、五社の宮の北側にカンヤマ（神山）という場所があり、かつては大日堂があったため、その跡を大日屋敷と呼んでいるという。白川八幡社の境内にカンヤマから移されたという大日如来像を本尊とする大日堂があったが、昭和13年頃の火災で大日如来像、大日堂とともに焼失している。大日如来像はご託宣で移されたとも、盜人が運び出したものを現在の八幡社付近で放置していたともいう。現在白川八幡社に集積されている石造物もカンヤマから運ばれたものだという。

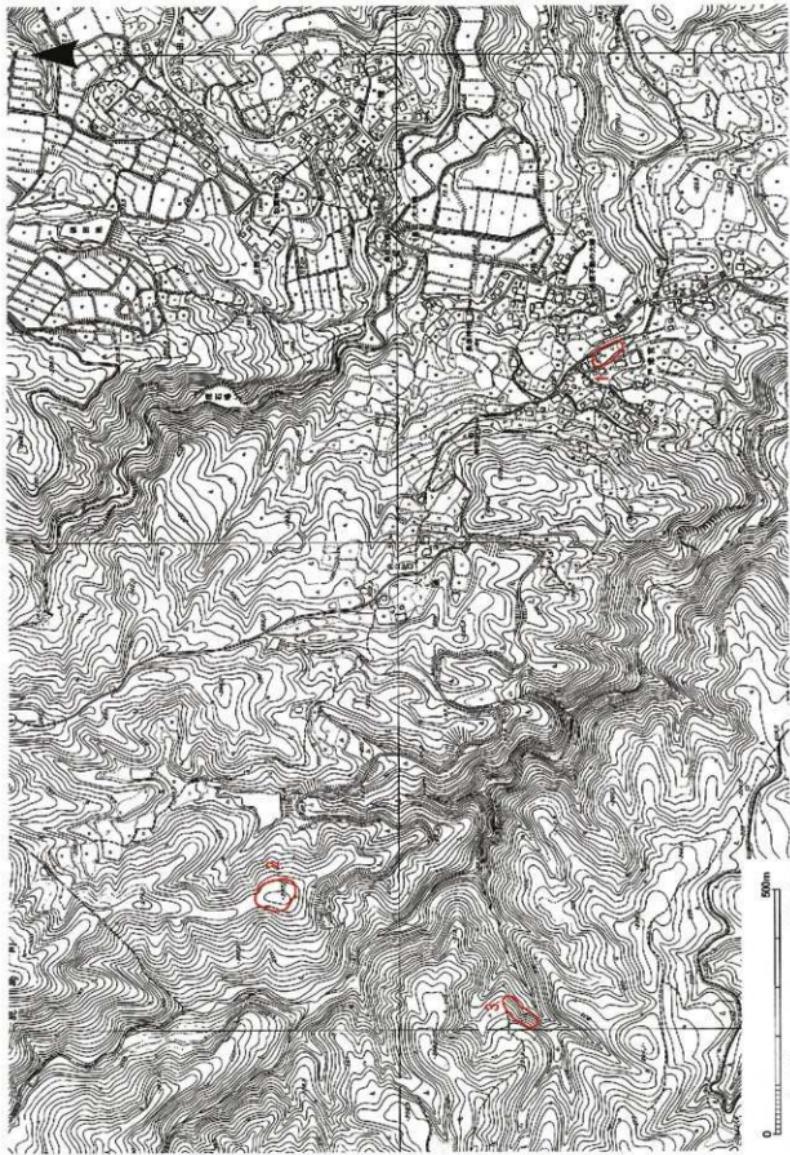
奈賀礼社：ほ場整備で失われてしまったが、宇波地区と白川地区の境に奈賀礼社という神社があった（第4図10）。地番は白川字奈賀礼25番地、境内88坪であり、社殿は無く、境内にある石を神室としていたという。祭神は経津主命である（佐伯1924）。現在白川の楯鉾神社境内にある石造物は、奈賀礼社から移されたものだという。

エ：八代仙道

八代仙（八大山）行場跡は宇波川支流滝川左岸の急崖、標高約180mの地点に位置する（第5図3）。行場跡の起源は不明であるが、伊須流岐比古神社所蔵の寛文11年（1671）及び元禄10年（1697）「石動山山内絵図」にはそれぞれ「八大山」が描かれており、特に後者には「八大山石動山権現奥院 岩屋の口十三間、深さ七間、高さ一丈、此内に不動尊御座候」の注記があり、かなりの規模の洞窟であったと推定できる。

明治維新以後、神仏分離令により石動山が衰退したのちは、どういう経緯がわからないが、法華宗行者の行場になっていたらしく、明治34年8月銘の記念碑が残されている（水見市教委1984）。法華宗行者はその後数年で行場を離れたらしい。

第5図 大塩道周辺その2、八代仙道周辺

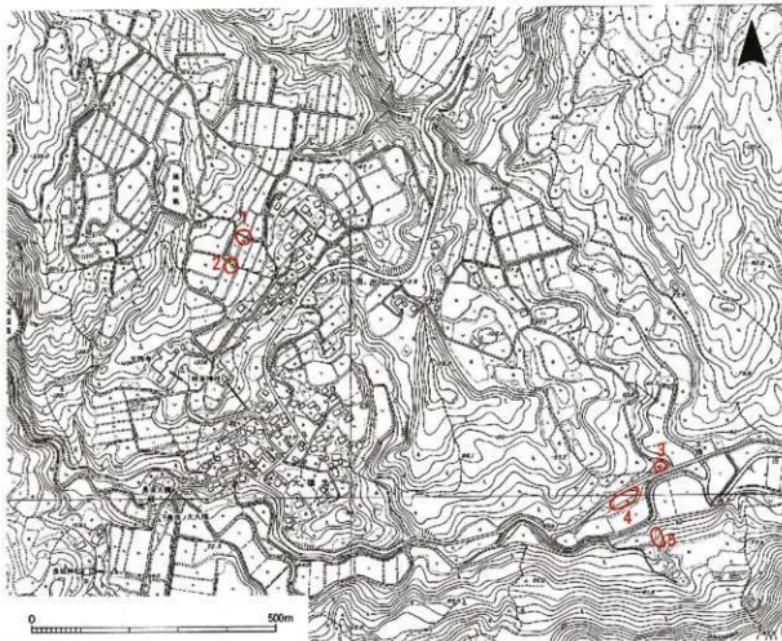


行場は明治45年1月の地震で入口が崩れて塞がれたという。大正2年の「秘境遊仙渓探検記」(「氷見時報臨時増刊 氷見探勝号」)によれば、「間口十間許奥行五六間の洞穴」とあり、まだ旧状が保たれていた。しかしその後徐々に崩壊したとみられ、現在は大きな転石と細々と流れ落ちる滝、半ば埋もれた明治34年の記念碑が残るのみである。

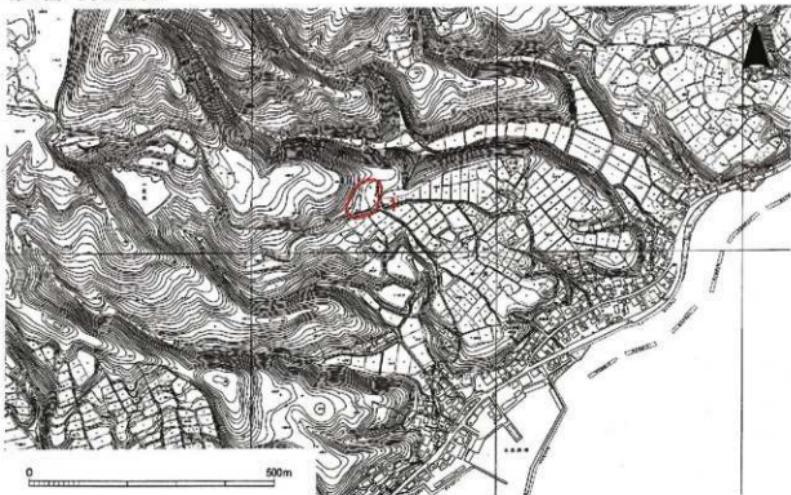
大窪道の六地蔵付近で分岐する八代仙道は、八代仙付近の丘陵上で途切れており、そこに堂宇が建てられていたような平坦面がある(氷見市教委1984)。現在ではすぐ近くまで林道が延びているが、斜面の造成が行われており、その平坦面を確認することはできなかった。八代仙へ向かうには、道の途切れた地点から宇波川、滝川の流れる谷底へ降りていかなければならないが、その谷に面した丘陵で間口約4m、奥行約2mの洞窟を確認した。洞窟の入口天井部は崩れしており、中は埋まってしまっている。天井部にはノミで削ったような痕跡が確認できるが、自然地形の可能性もある(第5図2)。

オ：中波地区

中波地区の火葬場跡にある集団墓地に中世の石造物が見られる(第7図1)。その内訳は、空風輪4、火輪6、如来形一石一尊仏1、一石五輪塔1、オベリスク型板石塔婆1、火水地輪1、宝篋印塔相輪部1、台座石?1である。このうち火水地輪は、一石五輪塔に似た形状だが空風輪部がなく、火輪上部にホゾ穴があけられたものである。中波地区には、道因坊・へずり坊・へんなく坊・みったく坊・みさく坊・みつみ堂など、寺院を連想させる俗称地名があり、石造物と関連するかもしれない。

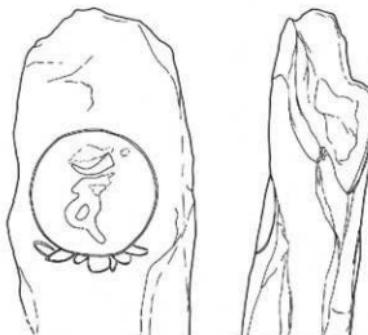


第6図 長坂道周辺



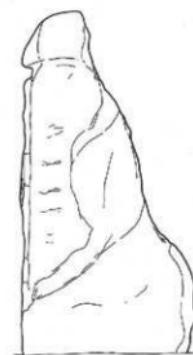
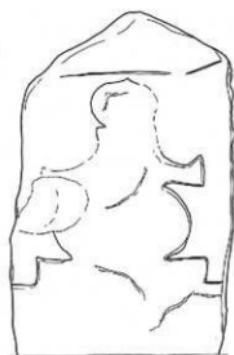
第7図 中波地区

平沢一里塚西下のパン塔(1/16)



0 20 40 60 80cm

平沢一里塚西下の
五輪塔陽刻板石塔婆その1
(1/8)



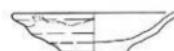
平沢一里塚西下の五輪塔陽刻板石塔婆その2(1/8)

0 10 20 30 40cm



0 10 20cm

白川薬師堂表探資料(1/3)



0 5 10cm

第8図 平沢地内の石塔と白川地内表探資料

第3章 測量調査の成果

ここでは千人塚・平沢一里塚遺跡・長坂落合中世墓の三カ所について実施した測量調査の成果と、表面採集した遺物について報告を行いたい。

第1節 千人塚（第9図）

千人塚は水見市戸津宮（戸上戸津宮）地区に所在する。ここは石動山から南東に向けて派出する尾根上、標高約135mにある。千人塚の東側には現在舗装された市道が通るが、この道はもともと石動山登拝道のひとつ、大窟道であった。

現在、「千人塚」と呼ばれる塚状の遺構が1基あり、その北側は尾根に沿って墓所になっている。これらの墓所を含めて付近を広義の「千人塚」と呼んでいる。昔は塚南側にも墓所が統いていたとの伝承があるが、現在は水田になっている。

千人塚は直径約6m、高さ約0.7mの円形を呈する。北西の部分は現代の墓所と重複している。塚上には2基の板石塔婆があり、その周間に板石や自然石、素焼きの骨壺破片が散乱する。ただし、砂利のような細かい石は認められない。

塚のすぐ東側には、大型の「キリーク」塔が1基ある。上半分は欠損し、下半分は土に埋もれている。地上高約70cm、最大幅及び奥行約50cmである。正面いっぱいに押型彫による月輪とその中に大きく同じく押型彫の「キリーク」を刻む。その下には線刻の蓮座を配する。詳しい年代は不明であるが、形態からして鎌倉期にさかのぼる可能性があり、千人塚の成立にかかわる石造物と考えられる（櫻井甚一「造形資料」石動山文化財調査団・水見市教委1989年所収）。原位置が保たれているかどうかは不明であるが、現況では正面が大窟道の方を向いている。

塚の北側の墓所には五輪塔火輪が2点あるほか、近世のものとみられる板石塔婆が並べられている。

第2節 平沢一里塚遺跡（第10図）

平沢一里塚遺跡は、水見市平沢地区に所在する。ここは石動山から東に向けて派出する尾根上、標高約210mにある。このすぐ西側を通る幅約3mの山道は、石動山登拝道のひとつ、平沢道である。

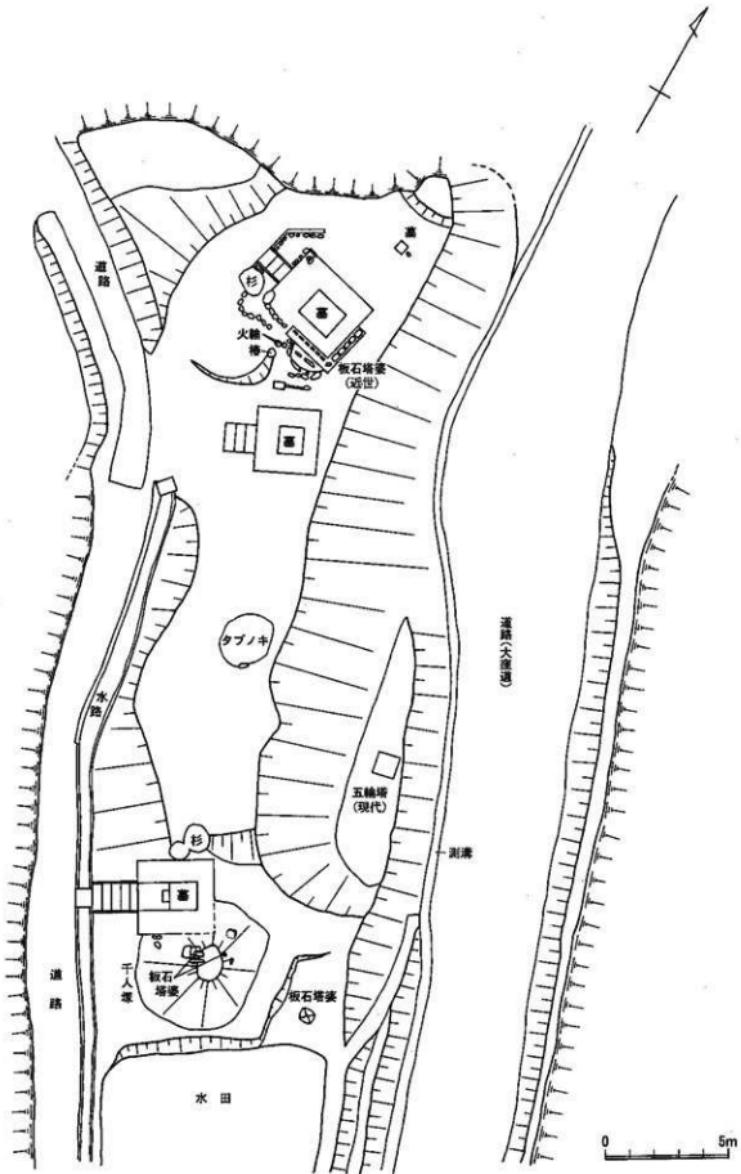
尾根上に塚状の遺構が1基あり、地元では現在これを一里塚と呼んでいる。今回の調査で新たに確認した遺跡である。一里塚周辺の小字は中尾、通称ヤマグチあるいはウワノと呼ばれている。

一里塚は直径約6m、高さ約0.5mの円形を呈する。中央には地上高さ1.15m、最大幅0.8mの自然石の立石がやや南に傾斜して立っている。立石に文字などの痕跡は認められないが、その西側に40cm大的の石が二つ並べられており、現状では平沢道側が正面と意識されているようである。立石の周囲には2cm前後の円礫が敷き詰められており、その中には墨痕が認められるものがあった。これら13点を採集して水洗・観察を行ったところ、うち6点が一字一石の経石であった。なお、塚の頂部で縄文時代の擦石を採集した。他の石と一緒に周辺からここに寄せられた可能性がある。

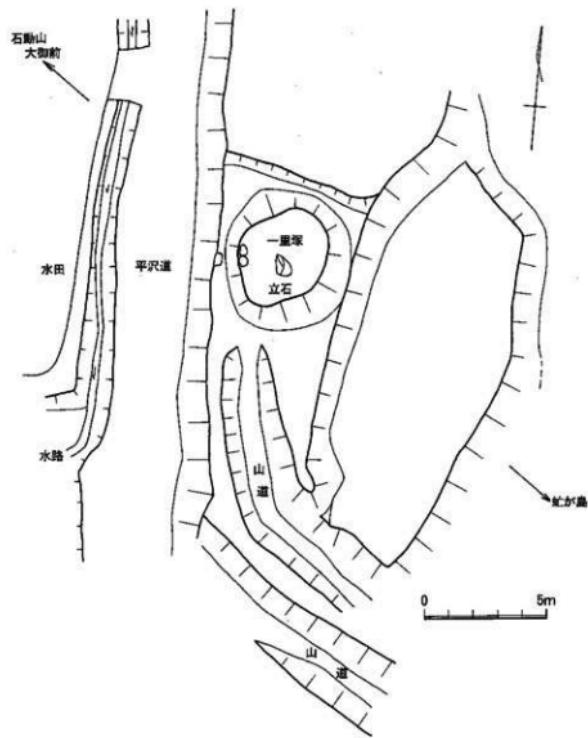
第3節 長坂落合中世墓（第11図）

中田地区から長坂地区へ登る市道に架かる二又橋の近く、下田川と別所川が合流する地点近くに長坂落合入塚が所在する。長坂落合中世墓は、行入塚の市道を挟んだ南西約50mに所在し、標高は約50mである。今回の調査で新たに確認した遺跡である。

発見の契機となったのは地元寺岡清氏による調査である（寺岡2003）。遺跡付近の通称地名は落合で



第9図 千人塚測量図(1/200)



第10図 平沢一里塚遺跡測量図(1/200) ※西井龍儀・宮田進一・大野完作成

あり、遺跡は昭和20年代に長坂から離村した落合家の墓所であった。なお、墓所への登り口には「落合の庚申様」と称する四角石があったというが、現在は見当たらない。

遺跡の最高部に、切り通しの道で半裁された直径約4.2mのマウンドがあり、上面に集石が確認された。その集石から南側の斜面にかけて中世珠洲の破片が散布しており、壺・すり鉢各1個体分を採集した。マウンドの東側に南に向けて緩やかに下る微傾斜地がある。その上に4カ所の集石があり、そのうち中央の集石2には中世の五輪塔（火輪・水輪・地輪）、板石塔婆、一石一尊仏および近世の墓標、丸彫りの地蔵尊3体が置かれている。もともとこの地は近世からの墓所であったが、墓を他へ移した際に、周辺の片づけを行ったといい、集石や石造物はその際に集められた可能性がある。

現在市道によって隔てられているが、本遺跡と長坂行入塚は本来一体のものであった可能性が高い。なお、中田から長坂へ登る旧道は、行入塚・落合中世墓のある丘陵を下田川に沿って南へ迂回するルートであったと考えられる。また行入塚と落合中世墓が所在する地点は、旧長坂村と旧中田村の境にあたる。

第4節 遺物（第12図）

1は千人塚で採集した珠洲壺又は壺の破片である。胎土に白砂粒を含み、焼成はやや甘く、色調は灰色を呈する。叩き目の幅が3mmとやや粗く、室町時代のものであろう。

2～7は平沢一里塚遺跡で採集した一字一石の経石である。経石はいずれも赤褐色（酸化鉄か）を呈する。石材は不明である。2は4.5×3.4cm、厚さ1.9cm、重量15.5gである。「无（無）」の字を記す。3は3.4×2.7cm、厚さ1.4cm、重量7.9gである。「中」の字を記す。4は3.5×2.6cm、厚さ1.5cm、重量9.3gである。「問」の字を記す。5は3.3×2.6cm、厚さ1.0cm、重量6.4gである。「皆」の字を記す。6は2.7×1.8cm、厚さ0.5cm、重量2.5gである。記されているのは「足」の異体字「豆」であるが、足偏の漢字の略とも考えられる。7は半分に欠けており、残存値で1.8×2.4cm、厚さ0.8cm、重量2.7gである。文字は不明である。

8は平沢一里塚遺跡で採集した縄文時代の擦石である。長さ15.3cm、幅7.2cm、厚さ5.1cm、重量771gであり、石材は不明である。

9・10は長坂落合中世墓で採集した珠洲である。9はロクロ壺上半部の破片である。口径9cm、胎土は白砂粒を若干含み、焼成は良好、色調は青灰色を呈する。肩部の波状文は幅9mmに5条の単位である。10はすり鉢である。数片の破片であるが、全て同一個体と考えられる。口径32cm、器高13.7cm、底径13.5cm、胎土は白砂粒を若干含み、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈する。おろし目は29mm幅9条の単位である。これら二つの資料は珠洲編年のⅢ期（13世紀後半）と考えたい。

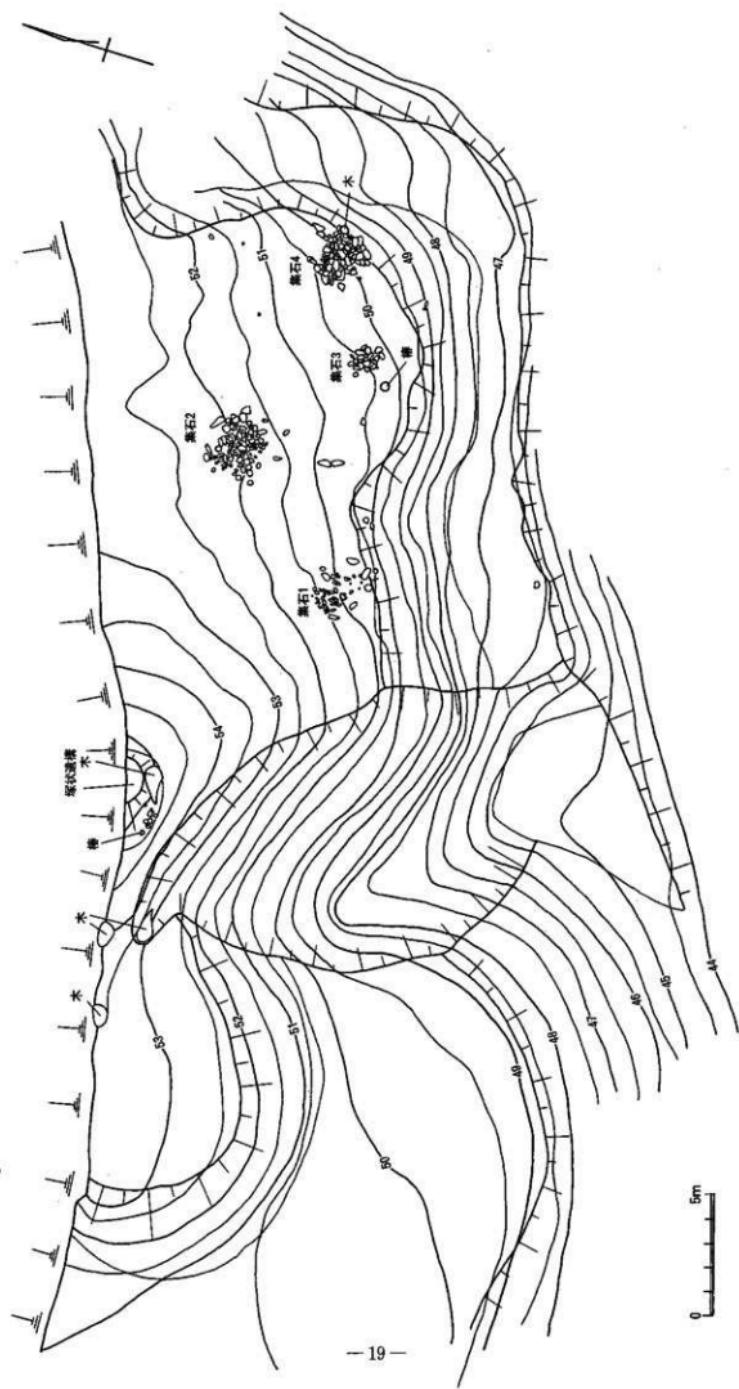
第5節 まとめ

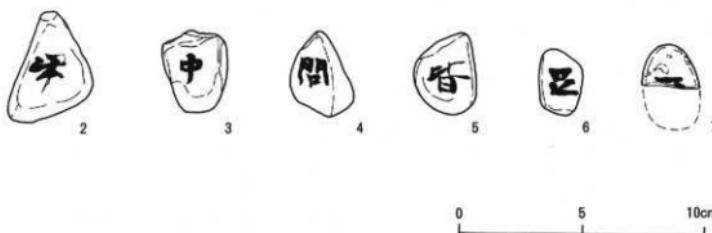
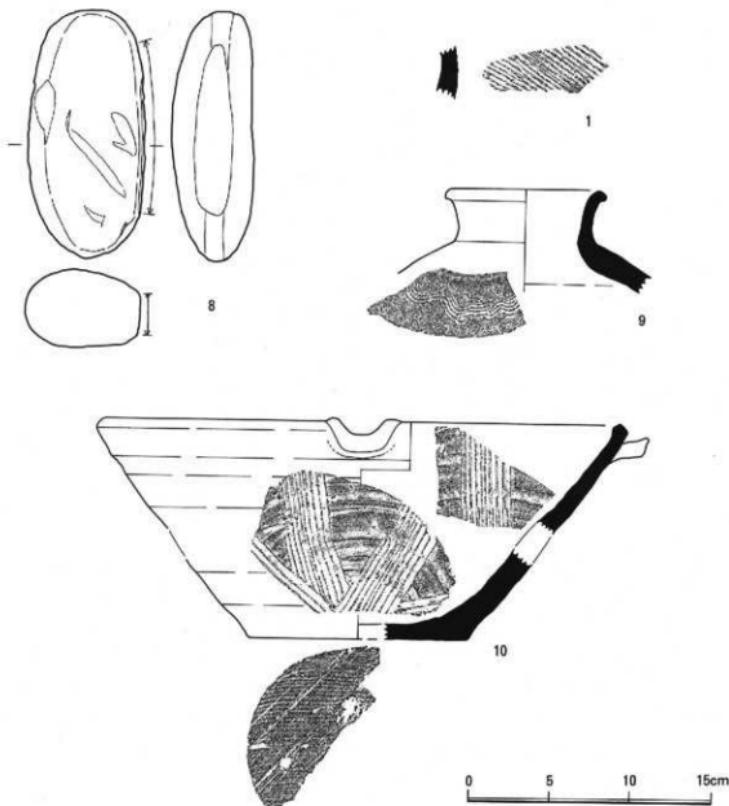
千人塚は石動山大塚道に面し、塚の横にあるキリーク塔は鎌倉時代にさかのぼる可能性をもつ。この場所は近世以降墓地として利用されているが、五輪塔残欠や板石塔婆があることから、墓地としての起源は室町時代にさかのぼる可能性がある。

ところで現在の戸津宮地区は、上戸津宮と下戸津宮の二つの地区から成るが、千人塚の所在するのは上戸津宮地区である。この上戸津宮地区は、ほぼ近世の大塚村おおつかむらにあたる。

天正15年（1587）12月、石動山復興のため大塚村へ移り住んだ大工16名が、前田利長より居屋敷を扶持され、あわせて、とゞ宮村九俵・長坂村四俵・うなみ村三俵の都合十六俵、各自一俵分の大塚村大工屋敷地の物成が赦免された（大塚大工神明講文書）。大塚大工は加賀藩の御用大工を仰せつけられた職

第11図 長坂落合中世墓測量図(1/200)





第12図 遺物実測図 (1・8~10 : 1/3、2~7 : 1/2)

能集團で、前田家の出身地尾張國荒子から前田利家に従軍し、土木工事や陣屋の建設を行ったと伝えられる。

大塙村は標高120～150mの傾斜した山間地に位置しており、その後延宝3年（1675）に至って初めて高十石余が新聞された。この新聞地を地元では「開」または「大塙」と呼んでいる。大塙大工移住以前の大塙村についての史料はなく、これら地理的条件などを考慮すると、おそらく大塙村は大塙大工の移住が機会となって中世末に成立したのではないかと推定される。とすれば、中世において大塙道をたどって石動山に登る場合、戸津宮（現在の下戸津宮）が最後の集落であり、ここから急な坂を登り終えたところに千人塚が位置していたと考えられる。

一方、平沢一里塚遺跡は石動山平沢道に面し、塚の中央には立石が据えられている。また、6点の一宇一石経石を採集した。富山県内ではこれまでに11カ所の一宇一石経石出土例があり（戸廉・橋本2003）、発掘調査によって70380個の経石が出土した富山市の塚根経塚は、室町時代末頃と推定されている（富山市教委1978）。他の例も中世から近世のものとされている。

平沢一里塚遺跡の立地は見晴らしの良い高台となっており、富山湾や虹が島を遠望できる。地元の人の話では、昔は一里塚・石動山大御前・虹が島の3カ所を、沖に出た漁師が目印にしたという。地図上で確認すると、これら3カ所はほぼ一直線上に並んでいる（第1図参照）。なお、途中に杉林があるため、現在一里塚から石動山大御前を望むことはできない。平沢一里塚遺跡は、平沢集落から急な坂を登り終えたところに位置しており、ここから石動山までの間に集落は認められない。おそらく中世においても同じ状況であっただろう。

長坂落合中世墓は、行入塚と一緒にものと考えられ、中田地区から長坂地区へ至る道路に面し、ここは中田村と長坂村の境にある。行入塚の中央には立石が据えられている。長坂落合中世墓には数カ所の集石がみられ、五輪塔や板石塔婆などの中世石造物や鎌倉時代後半の珠洲が確認されることから、中世以来の墓地であったと考えられる。

さて、長坂地区には現在曹洞宗寺院の光西寺がある。光西寺は長坂地区ほぼ全戸を檀徒とするほか、平・平沢・吉岡・戸津宮・大森・白川各地区といった市北部丘陵地域にも檀徒が多く、浄土真宗の多い水見の中で、独特的曹洞宗信仰圈を形成している。

しかし、光西寺は慶安元年（1648）に氷見市南部の飯久保から移転した寺院であり、直接中世まで系譜をさかのぼらせるることはできない。ここで、光西寺の所在地が長坂字古寺であることから、光西寺移転以前に別の寺院が存在したのではないかという推測が成り立つ。橋本芳雄氏は、もともと長坂には石動山の有力な末寺あるいは別院があり、天正10年（1582）の石動山合戦においてこの寺も衰微あるいは無住となつたため、飯久保にあった光西寺を長坂へ誘致、移転させ、檀徒を禪宗に転宗させたのではないかと推察している（橋本芳雄「石動山麓長坂村の民俗」石動山文化財調査團・氷見市教委1989所収）。

また、長坂地区に鎮座する長坂神社と、戸津宮（下戸津宮）地区に鎮座する父宮神社は、ともに明治以前は五社権現を称していた。石動山の伊須流岐比古神社は中世以降天平寺と習合され五社権現と称し、周辺地域に多数の分霊社を設立した。長坂神社と父宮神社は石動山に最も近い分霊社と考えられる。特に戸津宮の地名は「外つ宮」を意味し、山上の内宮に対する外宮に由来すると思われる（橋本芳雄同論文）。

さらに東寺造営にかかる応永20年（1413）12月の越中國棟牌免除在所注文（東寺百合文書）では、石動山領として「しらかわとくみや」があげられており、15世紀初め頃白川と戸津宮が石動山領であっ

たと考えられる。

第2章で触れた奈賀礼社は、宇波地区と白川地区の境に位置し、地番は白川である。上記史料によれば、「うなみ」は「伊勢殿」とあり、これは政所執事として伊勢氏が管領する幕府御料所（直轄領）と考えられる（高森1986）。とすれば、白川までが石動山領であった時期、奈賀礼社が幕府御領所であった宇波との境界となっていた可能性が高い。幕府は白川・戸津宮を石動山領と認めるかわりに、海岸に面した交通の要衝で、石造物石材の産地でもあった宇波を直轄地としていたと考えられる（水見市教委2000）。奈賀礼社の祭神は経津主命であるが、白川地内に鎮座する楯鉾神社の祭神も同じ経津主命である（佐伯1924）。さらに本来五社権現と称していた長坂神社の祭神のひとつが経津主命である。

このように水見市の石動山山麓地域、とくに長坂・戸津宮地区は、石動山と境を接する地域であるとともに、中世には時として石動山に含まれる地域でもあった。

ここで今回測量調査を実施した三ヵ所の遺跡に立ち戻り、改めてこれらを比較すると、次のような共通点がある。

- a：いずれも石動山登拝道に面している。
- b：いずれも立石もしくは大型の板石塔婆が据えられている。
- c：千人塚と平沢一里塚遺跡は集落が途切れた見晴らしの良い場所に位置する可能性が高く、長坂落合中世墓は村境に位置する。
- d：千人塚と平沢一里塚遺跡は共に直径6m程の円形を呈する。
- e：千人塚と長坂落合中世墓は鎌倉時代にまでさかのぼる可能性がある。
- f：千人塚と長坂落合中世墓は墓地として利用され、平沢一里塚遺跡は経塚の可能性がある。

これら三ヵ所の遺跡は、墓地あるいは経塚といった性格をもっているが、上記のうちa～cの共通点に注目すれば、本来は境界榜示の意味合いをもつものといえるのではないか。

石動山周辺の石造物を境界榜示石とみる考えは、すでに京田良志氏（「石動山境界榜示について（覚書）」水見市博1985所収）や小堀卓治氏（「八代仙周辺地域の信仰と生業」石動山文化財調査団・水見市教委1989所収）によって示されているが、今回発見した平沢一里塚遺跡と長坂落合中世墓は、石動山の境界榜示とかかわる新たな知見といえよう。

付章 西朴木地内出土の資料について

はじめに

平成14年10月、氷見市西朴木地区在住の正木実氏から、過去に同地区内から出土した古銭についての情報をいただいた。その後も正木氏からはたびたび同地区内から出土した考古資料について情報をいただき、今年度はそれらの資料を実見したり、現地を案内して頂いたりする機会を得た。そこで付章としてこれらの資料をこの場で紹介したい。なお、銭貨の分析については宮田進一氏に、人骨の分析については森沢佐歳氏にそれぞれお願ひし、玉稿を賜った。

西朴木地区の地理的環境について（第13図）

西朴木地区は、氷見市中央部に西から東にむけて張り出した朝日山丘陵の南側に位置する。万尾川支流坂津川と朴木川が流れ、南東に開けた小谷に位置する。近世には朴木村と呼ばれたが、明治中頃に西朴木と改められた。

谷の南側には現在平野が開けるが、ここは本来布勢水海が入り込み、近世になって徐々に干拓された場所である。

西朴木フルヤチ遺跡（第13図1）

西朴木地区北側の小丘陵の南裾の畑地に位置し、標高は約10mである。昭和24・25年頃、正木氏が畑を耕作中に銭貨を発見した。発見当時、銭貨は約200枚ごと6本程の塊になっていたが、容器は確認されていない。また発見の翌年頃には、正木氏の母ムツ氏が同じ畑で大量の古銭（5000枚程か）を発見したという。これらの銭貨は人にあげたり、古物商に売り払ったりしたため、現在正木氏の手元に残っているのは1470枚である。

銭貨の詳しい内訳は、宮田進一氏による別項の通りである。初鋤年の最も古いものは唐の開元通宝、最も新しいものは明の宣徳通宝であり、北宋銭が最も多い。埋納が一度に行われたものとすれば、15世紀に入ってからのものであろう。

なお、古銭出土地のすぐ西側は、春日社跡地という（第13図4）。

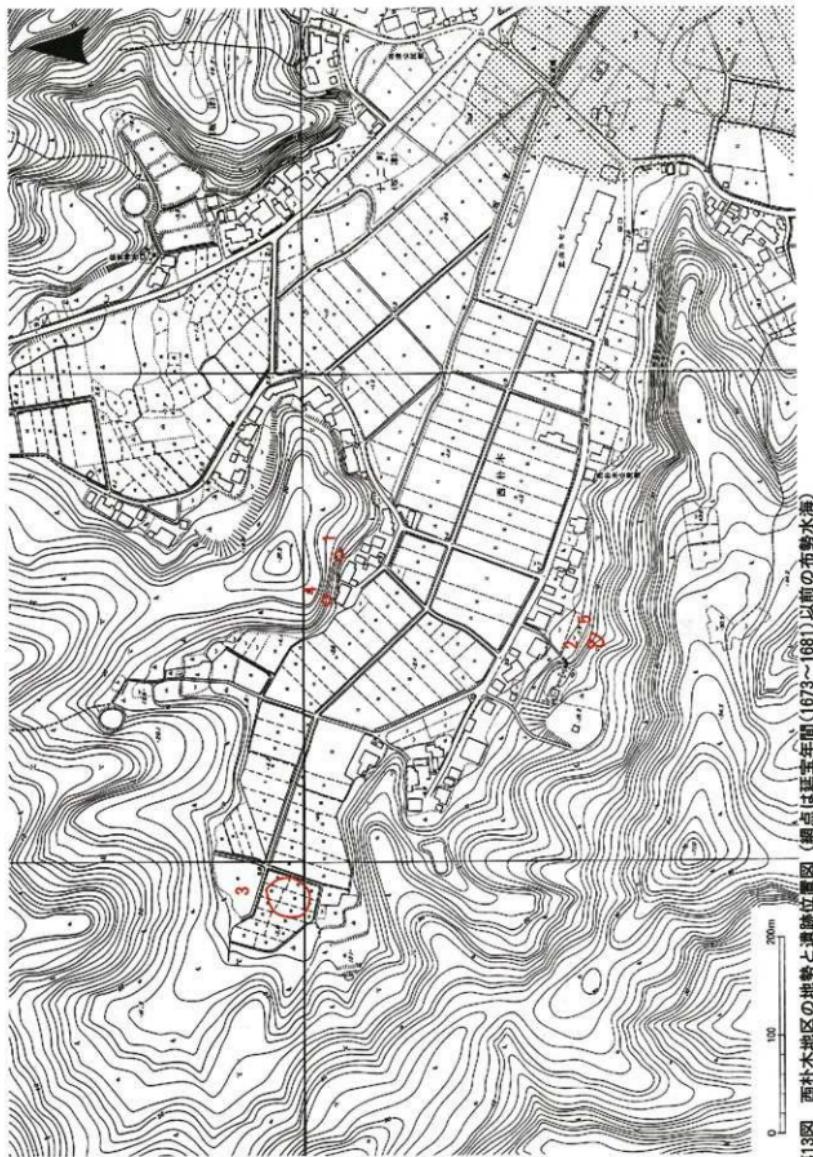
西朴木ドウガヤチ遺跡（第13図2）

西朴木地区南側の丘陵北斜面裾に位置し、標高は約12mである。平成15年5月、地元の南一雄氏がタケノコを掘っていたところ、焼骨をおさめた珠洲壺が出土した。

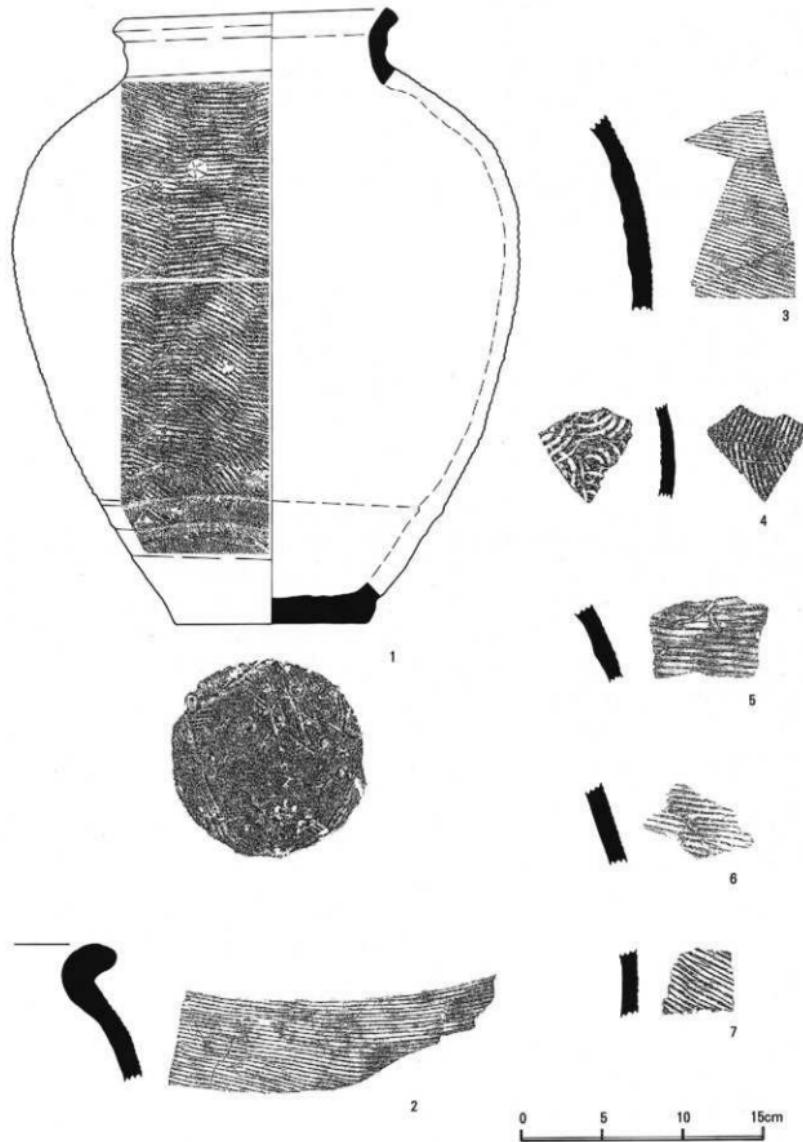
出土地点はドウガヤチと呼ばれる谷の下である。ここには現在小さなため池があり、その脇には今も流れるわき水がある。地元ではこれを「カソノンハンの水」と呼ぶ。またため池の脇は白山社の跡地である（第13図5）。

壺が埋納されていた部分は幅約6mにわたって小規模な地滑りが起きており、壺は約50度傾いていた。発見者の話によると、壺の上には60×30×10cmほどの板石が乗っており、周囲には拳大の河原石が10個ほどあったという。また、周辺からは別個体の珠洲破片も採集されていた。

火葬骨を埋納した珠洲壺（第14図1）は口径16.5cm、底径12.0cm、器高38.3cmで、口縁部を約15%欠く。胎土は白色の5mm前後の砂粒を若干含み、焼成は良好、色調は灰色である。肩部に白色の自然釉が付着する。外面は綾杉状の叩き目を呈し、肩部に印字文「大」の刻印を1つ施す。珠洲編年のⅢ～Ⅳ期（吉岡1994）のものであろう。



第13図 西朴木地区の地勢と造跡位置図（網点は延宝年間(1673~1681)以前の布勢水海）



第14図 遺物実測図 (1/3)

中に納められていた火葬骨の詳しい分析については、森沢佐歳氏による別項の通りである。成人男性1体分の火葬骨とみられる。

付近で採集された珠洲破片は2つある（第14図2・3）。2は珠洲壺の口縁部破片である。口径は約56cmと推定され、約10%の残存率である。胎土は精緻、焼成は良好、色調は暗青灰色である。珠洲編年のⅢ～IV期のものであろう。3は珠洲壺の胴部破片である。胎土は精緻、焼成は良好、色調は暗青灰色である。2とは別個体の可能性もある。

西朴木ジョウコウジ遺跡（第13図3）

西朴木地区の谷奥、標高約8mに位置し、現況は休耕田である。現地は昭和40年代に耕地整理を受けしており、正木氏によって遺物が採集されている。

採集されている遺物は、古代須恵器、中世珠洲、近世越中瀬戸である。このうち須恵器1点と珠洲3点を示した（第14図4～7）。

4は須恵器壺の破片である。精緻な胎土で、焼成は良好、色調は灰色である。

5は珠洲壺の破片である。精緻な胎土で、焼成は良好、色調は青灰色である。「大」の字を刻む。6は珠洲壺である。胎土に白砂粒を含み、焼成は良好、色調は青灰色である。7は珠洲壺である。精緻な胎土で、焼成は良好、色調は青灰色である。これら珠洲は叩き目が粗いことから室町時代のものと考える。

まとめ

以上、西朴木地区の三ヵ所の遺跡の紹介を行った。古代から近世までの資料があるが、特に中世の資料が充実している。西朴木ドウガヤチ遺跡は13世紀後半から14世紀頃、西朴木ジョウコウジ遺跡と西朴木フルヤチ遺跡が15世紀頃と時期差があるが、東南東に開けた谷の奥部に寺院伝承地があり、谷の出入口の丘陵樅に、中世墓と埋納銭出土地が向かい合ってあるという配置である。

最後に、中世墓と埋納銭に絞って周辺の遺跡との関連について述べ、まとめとしたい（以下、第15図参照。文献は水見市2002参照）。

まず、西朴木地区とは丘陵をはさんで東隣の谷にあたる荒館地区には荒館ソモギ遺跡があり、ここでは火葬骨を納めた瀬戸壺1、珠洲壺2が出土している（第15図3）。荒館地区にも中世寺院の伝承がある。

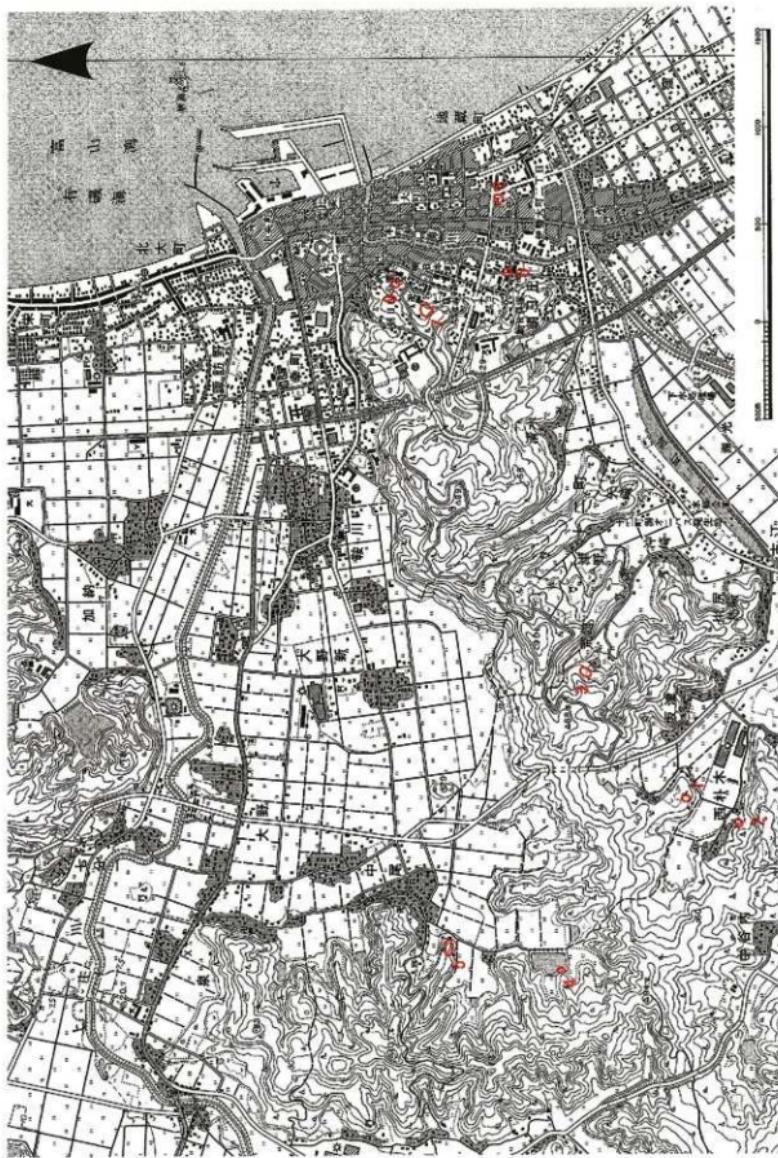
一方、西朴木地区とは丘陵をはさんで北隣にあたる中尾地区にも、中世寺院の伝承があり、中尾ガメ山遺跡では埋納銭1805枚が出土している（第15図4）。さらにその北の丘陵には中尾茅戸中世墓があり、五輪塔残欠と珠洲壺・壺・鉢が出土している（第15図5）。

市街地に目を向けると、まず珠洲壺に入れられた埋納銭6495枚が出土した朝日十字路遺跡があり、15世紀前半頃の埋納と推定されている（第15図6）。ここは湊川左岸に位置し、広義の朝日貝塚に含まれる場所である。朝日貝塚範囲確認試掘調査では室町時代の遺物も出土しており、遺跡北寄りの地区では15世紀、東寄りの地区では16世紀の資料が多くあった（水見市教委1997）。

中世墓では上日寺中世墓・伊勢玉神社中世墓・蓮乗寺中世墓がある。

上日寺中世墓は、上日寺境内南側に位置する通称寺山丘陵の東側斜面から頂部に広がっており、斜面下の行田池からも遺物が出土している（第15図7）。14世紀後半から15世紀の石造物、13世紀前半から16世紀初めの土器類、12世紀後半から15世紀の珠洲、12世紀後半から13世紀前半の青磁、14世紀末から15世紀初めの瀬戸、16世紀の信楽が出土している。上日寺は、白鳳10年開基と伝えられる高野山真言宗

第15図 西朴木地区周辺の中世墓と埋蔵銭出土地



の寺院であり、16世紀前半の史料には朝日觀音の名がみえる（「遊行廿四祖御修行記」水見市1998所収）。上日寺中世墓の資料は、中世の同寺を裏付ける資料といえる。

伊勢玉神社中世墓は、渓川右岸に位置する（第15図8）。15世紀代の石造物のほか、14世紀から15世紀中頃の珠洲、14世紀後半から15世紀の瀬戸、13世紀・15世紀前半・16世紀の土師器が出土している。伊勢玉神社は元々神明宮と称していたが、由緒については不詳と記されている（「文政十一年越中国社号帳」及び「神社明細帳」水見市2000所収）。

蓮乗寺中世墓は詳細不明であるが、かつて寺院背後の丘陵から珠洲が出土し、境内には中世石造物が集積されている（第15図9）。蓮乗寺は嘉暦2年（1327）に日遍が水見稻穂村に草庵を建立したのがはじまりと伝えられる日蓮宗寺院で、天正年間に水見町へ移転したという（「寺院明細帳」水見市2000所収）。その後天保2年（1831）の水見町大火で焼失したため、弘化元年（1844）までには現在地へと移転している（『応響雜記』）。従って中世墓を蓮乗寺と直接関連させることはできないが、移転以前に別の寺院が存在した可能性は残される。

水見市街地については、親応3年（1352）の史料に、「水見渓」・「北市」・「南宿」・「大橋」の記述があり、布勢水海から流れ出る渓川の河口付近に渓があり、左岸に市町の機能をもつ集落が、右岸に宿場町の機能をもつ集落が形成され、両集落を結ぶ橋が渓川に架けられていたことがわかる（「得田素章代子息斎藤六章房軍忠状案」水見市1998所収）。従って14世紀中頃までには、近世へと引き継がれる水見町の基礎ができあがっていた。当然中世にも活発な宗教活動が展開していたのであろう。

次に、市街地と中尾地区の中間に位置する鞍川地区は、14世紀末から16世紀中頃までの史料にみえる鞍河氏の本貫地とされる。鞍河氏は越中守護代神保氏の被官として著名であるが、永享年間（1429～1441）頃には山城国乙訓郡代として活躍し、明応年間（1492～1501）には京都において、越中に亡命した將軍足利義材の帰洛について奔走している（横澤1994・2003）。鞍河氏の居城は、中尾地区的西側標高137mを頂上とする千久里山に所在する千久里城と考えられている。

さらに、西朴木地区を中心とする十二町・万尾・中谷内地区は、阿努庄内の相浦村に相当する（児島1981・1985）。文明13年（1481）には將軍被官として越中国住人相浦又次郎の名がみえる（「親元日記」水見市1998所収）。

第15図の地図には、西朴木フルヤチ遺跡の前から丘陵を越えて中尾ガメ山遺跡・中尾茅戸遺跡へと続く道が記されている。また、荒館地区から丘陵を越えて中尾地区へ向かう道も記されている。一方、市街地と西朴木地区・荒館地区は、布勢水海（十二町潟）及び渓川を利用した水運で結ばれている。3箇所の埋納錢出土地は、水運や街道で結ばれた場所に位置するといえる。水見渓を中心とした流通・宗教活動を考える上で、興味深い立地といえよう。これらの地域を考察する上では、阿努庄や室町幕府御料所との関連も必須であり、機会を改めて考えてみたい。

西朴木ドウガヤチ遺跡の焼骨について

森沢佐歲*

はじめに

水見市西朴木の西朴木ドウガヤチ遺跡出土の珠洲焼壺内に納められていた骨片群について、以下のとおり概略を報告する。

なお、内容物はあらかじめ静水で軟膨化し、土器内より取り出し、流水にて付着土壤を除去してある。自然乾燥後の大骨片（骨種と部位の同定しうる骨片）、小骨片（骨種は概ね同定しうるが部位の不明な骨片）、粉状骨（粉碎された粒状小塊状骨で土壤成分も含まれる）の重量は表のごとくである。

出土骨の重量（重量比）

| 分類 | | g | (%) |
|----|---------|-------|-----------|
| 人骨 | | | |
| | I 大骨片 | | |
| | a) 頭蓋骨 | 162 | (12.1) |
| | b) 体幹骨 | 48 | (3.6) |
| | c) 上肢骨 | 325 | (24.2) |
| | d) 下肢骨 | 145 | (10.8) |
| | 小計 | 680 | (50.7) |
| | II 小骨片 | | |
| | a) 頭蓋骨 | 40 | (3.0) |
| | b) 体幹骨 | 97 | (7.2) |
| | c) 体肢骨 | 525 | (39.1) |
| | 小計 | 662 | (40.3) |
| | III 粉状骨 | | |
| | a) 骨細片 | 0 | (0.0) |
| | b) 骨灰 | 0 | (0.0) |
| | 小計 | 0 | (0.0) |
| | 小計 | 1,342 | (100.0) |
| 獸骨 | | | |
| | 小計 | 0 | (0.0) |
| 合計 | | 1,342 | (100.0) |

また、この藏骨器内出土骨は後述するように、色調や形状よりすべて人焼骨である。ほぼ完形に近い骨は計測値を文中に付記した。出土骨の個体数は、性や年令に伴う人骨の特徴について、重複する部分骨の比較、左右側の個体識別などにより推定した。

A 出土骨重量と骨種

(1) 出土骨の重量

出土骨の総重量（自然乾燥後）は1,342gである。そのうち、大骨片の重量は680g（50.7%）である。

(2) 大骨片の骨種

大骨片はいずれも骨種としてほぼ全身骨格が観察される。

頭蓋骨（162g）：後頭骨、蝶形骨、側頭骨、頭頂骨、前頭骨、上顎骨、口蓋骨、頬骨、下顎骨の9種の大骨片および脱落歯1個（小白歯）が出土し、鼻骨、篩骨、下鼻甲介、涙骨、鋸骨、舌骨の6種は見当たらない。

体幹骨（48g）：頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、肋骨の5種の大骨片が出土し、尾椎、胸骨の2種は見当たらない。

上肢骨（325g）：肩甲骨、鎖骨、上腕骨、桡骨、尺骨、手根骨、中手骨、指節骨の8種が出土する。

下肢骨（145g）：寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、膝蓋骨、足根骨、中足骨の7種が出土し、趾節骨は見当たらない。

(3) 小骨片の骨種

小骨片（662g）は主として体肢骨525g（主に下肢骨）であるが、部位は同定できない。

大・小骨片はすべて人骨のほぼ全身骨格の部分骨である。これらの骨片はすべて焼骨である。骨の色調は概して白色（主に下肢骨）または灰白色から黒色（体幹骨、顔面骨、頭蓋内板）または部分的に黄褐色を呈する領域が散在（頭頂骨外板、頬骨下縁）している。また、骨質は堅く、その破縫は鋭利である。

B 観察個数

大骨片は骨種と部位が同定できるので、各骨に分類し、さらに同一部位を包含する部位に区分して、最少の個体数の作業を行った。以下に主な観察部位を列記する。個数はいずれも1箇所であり、重複部位は観察できない。（骨片数でない。1骨片中には数箇所の観察点がふくまれるものもある。）

(1) 頭蓋骨

- 1) 後頭骨 a) 底部、b) 外側部左：後頭頸、舌下神経管を含む部位、c) 後頭鱗：左ラムダ縫合アステリオン部を含む部位
- 2) 蝶形骨 a) 蝶形骨体後部を含む部位、b) 大翼右：基部を含む部位
- 3) 側頭骨右 a) 錐体乳突部の内耳孔を含む錐体部位、b) 側頭鱗部の頭頂切痕を含む部位
- 4) 頭頂骨左右 a) 矢状縁を含む部位：左右、b) 前頭縁を含む部位：左
- 5) 前頭骨 a) 前頭鱗頭頂縁：左右の頭頂縁を含む部位、b) 前頭鱗：右の前頭切痕・鼻上弓・前頭筋を含む部位
- 6) 上顎骨右 a) 大臼歯部の歯槽突起・口蓋突起を含む部位
- 7) 口蓋骨右 a) 水平板を含む部位
- 8) 頬骨左 a) 全形
- 9) 下顎骨 a) ほぼ全形
- 10) 脱落歯（永久歯） a) 1根のもの：1個

(2) 体幹骨

- 11) 環椎 a) 外側塊左右を含む部位
- 12) 軸椎 a) 嗉突起を含む部位
- 13) その他の頸椎体を含む部位：2-3
- 14) 胸椎 a) 椎体を含む部位：4-5
- 15) 腰椎 a) 椎体を含む部位：1-3
- 16) 仙椎 a) 椎体を含む部位：4
- 17) 肋骨左右 a) 肋骨体を含む部位：右2、左1

(3) 上肢骨

- 18) 肩甲骨左 a) 肩甲棘の外側基部を含む部位
- 19) 鎖骨右 a) 体部を含む部位
- 20) 上腕骨左右 a) 骨幹の大結節稜を含む部位：左、b) 骨幹の三角筋粗面を含む部位：左右、c) 上腕骨頭を含む部位：左右
- 21) 桡骨左右 a) 桡骨体の桡骨粗面を含む部位：左右、b) 遠位端の尺骨切痕を含む部位：右
- 22) 尺骨左右 a) 肘頭を含む部位：左、b) 骨幹中央部を含む部位：左右、c) 尺骨頭を含む部位：右
- 23) 手根骨右 a) 月状骨：右？
- 24) 中手骨左右 a) 第1・第2中手骨：左、第3中手骨：右
- 25) 手の指骨右 a) 基節骨：左？

(4) 下肢骨

- 26) 寛骨左 a) 寛骨臼を含む部位、b) 腸骨翼の大坐骨切痕を含む部位
- 27) 大腿骨左右 a) 遠位骨幹の内転筋結節を含む部位：左、b) 遠位骨幹の膝窩面を含む部位：左右
- 28) 膝骨左右 a) 外側頸の上関節面を含む部位：右、b) 膝骨体のヒラメ筋線を含む部位：左右
- 29) 腓骨右 a) 骨幹を含む部位
- 30) 膝蓋骨左 a) 完形
- 31) 足根骨右 a) 距骨の外側を含む部位

これらの出土骨には部位の重複は見られない。また、大骨片には破断縫の形状と類似し、直接連結する箇所もある（前頭骨眼窩右上縫、下顎骨正中部、環椎前結節部、脛骨体右後面）。

C 所見

出土骨の緻密質、海綿質はともに厚い。ラムダ縫合は内外板とも遊離しているが、冠状・矢状縫合の外板は一部癒着し（マルチンの第3度）、同内板は癒着完了している。後頭骨の上頂線・最上線が強く（後頭隆起形成）、外後頭隆起の膨隆も強い（プロカの第2度）。側頭骨の乳突切痕は深い。乳様突起は中等度の大きさであり、その側壁には縫合痕が認められない。蝶後頭軟骨結合部は化骨完了している。前頭縫合は癒着消失している。眉上弓右の膨隆は強い。頬骨左はほぼ完形をなし、上部は黒色、下部は黄褐色を呈しており、加熱の影響も考慮しなければならないが、大きい（47.9mm×49.5mm）。下顎骨は全体黒色を呈し、ほぼ全形観察できる。下顎結合部は癒合し、オトガイ隆起の前下方突出が明瞭である。下顎骨は大きく（オトガイ幅48.6mm、下顎枝最小幅右35.2mm、枝最小高右58.1mm）、頑丈である（頬舌骨

筋線・オトガイ棘・咬筋粗面の起伏が強い)。上頸右大臼歯・下頸歯は齒槽中よりすべて脱落するが、齒槽部の萎縮・閉鎖は認められない(オトガイ高34.8mm、下頸体高右34.1mm、下頸体厚右13.9mm)。脱落歯として、小白歯1個が出土している(歯冠の咬耗度はマルチンの第2度)。体幹骨の骨端部はいずれも骨体部と融合している(軸椎高38mm、胸・腰椎の椎体高18-23mm)。鎖骨右は細く(中央周44mm)、鎖骨下筋溝は浅い。上腕骨左右の骨幹は太い(中央周左75mm、右72mm、最小周左70mm、右70mm、下端幅左62mm)。桡骨左右の骨幹は太い(最小周左44mm、右45mm)。尺骨左右の骨間縫は強い(骨幹幅径左18.0mm、右17.9mm)。左第1・第2中手骨、右第3中手骨はいずれも全形観察できる(最大長48.1mm、69.3mm、67.2mm)。体肢骨の骨端は骨幹といずれも融合完了している。腸骨・恥骨・坐骨の三骨は骨結合完了している。大腿骨左下端の内転筋結節の突出が強い。脛骨左右後面のヒラメ筋線は強く、後面にはさらに鉛直線が発達している。腓骨体右は頑丈である(最小周32mm)。膝蓋骨左も完形観察でき、この人骨の一部であろう(膝蓋骨幅38.3mm、膝蓋骨高36.1mm、膝蓋骨厚18.2mm)。

以上の年齢、性別に伴う人骨所見より、壮年末期から熟年期の男性骨1体分と思われる。

まとめ

水見市西朴木出土の珠洲焼窯内の人焼骨群の個体数を検討した。個体数を検討するにあたり、これらの人焼骨群は大骨片(骨種と部位の同定しうる骨片)、小骨片(骨種は概ね同定しうるが部位の不明な骨片)とに分類し、おもに大骨片の形態を観察した。

人骨の個体数は性や年齢に伴う特徴について、重複する部分骨の比較、左右側の個体識別などにより推定した。

- 1) 出土骨の総重量(自然乾燥後)は、1,342g(頭蓋骨202g、体幹骨145g、体肢骨995g)である。
- 2) そのうち大骨片(680g)は頭蓋骨:162g(23.8%)、体幹骨:48g(7.1%)、上肢骨:325g(47.8%)、下肢骨:145g(21.3%)である。
- 3) 大骨片は骨種としてほぼ全身骨格が観察される(上肢骨の形態の判明する大骨片が多い)。
- 4) 骨片には連結する骨片もあるが、部位の重複が認められない。
- 5) 出土骨の性別や年齢に関する特徴が類似しており、この人骨は壮年末期から熟年期の男性骨1個体と思われる。
- 6) 骨片には火熱による亀裂・変形が見られるが、切創などの死に直結する傷痕は認められない。また、病変の形跡も認められない。脛骨後面の船直線は古い形質の名残りと考えられる。
- 7) 出土骨重量は特に上肢骨の形態の判明する大骨片が多く、脱落歯、上位頸椎、中手骨などの小骨もほぼ全形観察されることから、丁寧に焼骨は収納されたと考えられる。

謝辞:人骨調査の機会を与えていただきました水見市民、主体者の各位に深謝申し上げます。また、この調査にあたって実際たゞさわった調査員より出土経過および出土状態について多くの資料や助言をいただきました。

(*元富山医科大学医学部)

関連文献

- 1) 文化庁文化財保護部編 『全国遺跡地図 16 富山県』 1974 國土地理協会
- 2) 森沢佐歲他 「蔽田薬師横穴墓群の出土人骨について」『富山県氷見市蔽田薬師中世墓発掘調査報告書』 1985 氷見市教育委員会・富山県砂防課 16-25
- 3) 森沢佐歲他 「香城寺惣堂遺跡第10号墓蔵骨器内出土骨について」『医王は語る』 1993 医王山文化調査委員会編 169-173
- 4) 森沢佐歲 「黒川上山古墓群出土の焼骨について」『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』 1995 上市町教育委員会 22-27
- 5) 森沢佐歲他 「一乗谷朝倉氏遺跡出土人骨について」『朝倉氏遺跡資料館紀要』 1987 福井県立朝倉氏遺跡資料館 21-27
- 6) 森沢佐歲他 「福井県成仏・木原町遺跡出土骨について」『金合丸・成仏・木原町遺跡』永平寺町埋蔵文化財調査報告書第4集 1994 永平寺町教育委員会 56-59
- 7) 森沢佐歲 「福井県三峯村墓地跡出土骨について」『三峯村墓地跡－平成10年度市内遺跡発掘調査報告書』鯖江市埋蔵文化財調査報告第2集 2000 鯖江市教育委員会 61-67
- 8) 森沢佐歲 「平時忠卿及び其の一族の墳ならびに下茶屋墓地出土骨について」『珠洲古陶関係遺跡詳細分布調査報告VI』 1999 珠洲市教育委員会 37-51
- 9) 森沢佐歲他 「人骨に関する所見」『埋蔵文化財緊急発掘調査報告第1— 西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告』 1973 新潟県教育委員会 31-32
- 10) 小片保・森沢佐歲 「A地区第9号炉址中人骨群の所見」『寺地硬玉遺跡－第2次調査概要』 1970 青海町役場
- 11) 清野謙次 「古墳横穴人骨の埋葬状態」『古代人骨の研究に基づく日本人種論』 1949 岩波書店 205-208
- 12) 大槻嘉男 「北陸日本人頭蓋骨の人類学的研究其8」『金沢医科大学解剖学教室業績2』 1993 1 金沢医科大学 1-18
- 13) 鈴木尚 『日本人の骨』 1963 岩波書店

水見市西朴木フルヤチ遺跡出土の一括大量出土銭

宮田進一*

はじめに

水見市西朴木在住の正木実氏が保管されている銭貨を実見し、整理する機会を得たのでここに結果を報告する。

1 発見の経緯

発見の経緯については付章の方に記されているとおりである。

なお、正木氏父親の善四郎氏が、昭和20年頃にこの山林を開墾していたときに、赤褐色の完形の甕が出土したが、中に何も入っていないく、そのまま現地の木の元に置いていたが、いつの間にかなくなってしまったという。

2 発見場所とその周辺

銭貨の出土場所は、北野芳松氏宅の裏山で、南側にのびる幅5m、長さ15mの小尾根の付け根にあたり、現状では地面の盛り上がり等は確認できない。この場所から東側へ延びる斜面地でも、以前、畑を耕していた時に、1~2枚の古銭が出土したという。

この場所から西側に続く斜面地を一段下がった平坦面は、春日社跡地である。現状では、幅約8m、長さ20mの平坦面であり、下の水田とは約数メートル程度の高低差がある。

この丘陵の頂部（標高27.3m）には、直径約14mの円墳が1基ある。さらに、尾根筋を東に下れば2基の円墳があり、西朴木古墳群を構成している。丘陵北側の斜面は、周辺の工場敷地の土砂を確保するために、削平されている。また、丘陵先端部は、昭和20年まで、水見市内の土壁用に土取りされていた。

この丘陵の北西側は尾根を切断するように、道が作られている。さらに北西側の斜面地には、集落の墓地がある。当地での古い家の一つである清水家の墓地の隅には、五輪塔の空風輪（粗粒砂岩）2基が確認できる。

3 一括大量出土銭の種類

正木氏の保管されている銭貨を整理した結果は、中国銭1,441枚、朝鮮銭1枚、不明28枚の1,470枚である。以下、詳細を述べてみる。

（1）中国銭（第16図～第19図、表1～表3）

中国銭は50銭名、72書体の1,441枚で、出土量全体の99%以上を占める。

①唐銭（1～3） 3銭名、3書体の115枚で、8%の出土量である。開元通寶は初鋤年が621年と845年のものがある。後者は開元通寶の背に鋤造地の地名を一字入れたもので、背文字が「洛」（3-2）3枚、「藍」（3-1）1枚、「菊」1枚、「潤」1枚である。

②五代十国銭（4・5） 乾徳元寶と唐国通寶の2銭名、2書体の2枚である。唐代の開元通寶は確認できなかった。

③北宋銭（6～33） 宋通元寶から宣和通寶までの28銭名、50書体の1,175枚で、出土銭貨の中で81.5



%を占める。皇宋通寶（164枚）、元豊通寶（154枚）、熙寧元寶（153枚）、元祐通寶（115枚）などが多く出土した。北宋銭は出土量が多いため、縁を擦って小さくなつたものや角を取っているものなどの加工が目立つ。内郭が45度ずれて鋳られたものや粗悪なものがある。

④遼銭（34） 大康通寶の1枚のみである。県内2例目である。

⑤南宋銭（35～44） 淳熙元寶から咸淳元寶までの10銭名、10書体の23枚で、出土量の1.6%である。これらの南宋銭は、背文に数字が入り、鋳造した初鑄年を示している。

⑥金銭（45・46） 正隆元寶と大定通寶の2銭名で、2書体の3枚である。

⑦明銭（47～50） 大中通寶、洪武通寶、永樂通寶、宣德通寶の4銭名、4書体の121枚である。全体の8.1%を占める。洪武通寶は背文に「浙」（48-3）（3枚）、「一錢」（1枚）の文字がある。

（2）朝鮮銭（第19図、表1～表3）

朝鮮銭（51）は朝鮮通寶の1枚だけである。

以上の1,470枚の出土銭貨を王朝別に見ると、表1のようになる。北宋銭が8割、唐銭と明銭が8%、南宋銭が2%である。今回の一括大量出土銭は、すべての銭貨の傾向を示してはいないが、唐銭が多く、明銭が少ない傾向を読みとれる。銭貨の出土量の上位ベストテンは、皇宋通寶・元豊通寶・熙寧元寶・元祐通寶・開元通寶・永樂通寶・天聖元寶・紹聖元寶・政和通寶・聖宋元寶である。おむね県内の傾向と類似している。この傾向は、富山県内の出土銭貨のそれと比較してもほぼ同じである（表4）。

なお、近年、模鋳銭・島銭などの銭貨が指摘されているが、その識別が出来なかった。また、銭貨を入れた容器は発見されていないが、県内の出土例から木箱・袋などが想定できる。

4 埋められた年代

西朴木フルヤチ遺跡の一括出土銭は発見後に抜き取られていて、さらに、銭貨の容器が出土していないため、埋納時期を探るには難しい。しかし、残っている出土銭貨の内、最も新しい銭貨は、1433年初鑄の明の宣徳通寶である。埋められた年代もそれ以降であることがわかる。

そこで、一括出土銭のうちの最新銭を基準にした時期区分の成果から考えてみる。永井久美男氏は13世紀から16世紀を8期に区分している（永井1996）。その後、6期以降の時期区分を見直し、16世紀第3四半期から17世紀第2四半期を、新たに9期・10期に設定し、最新銭と実年代を修正している（永井2002）。鈴木公雄氏も13世紀から16世紀を8期に区分している（鈴木1999）。最新銭に基づく両氏の時期区分は、実年代が少し違っているが、1期から5期までは同じ銭貨を基準にしている。6期以降、最新銭と実年代が違っている。

今回の一括出土銭は、宣徳通寶（1433年初鑄）が最新銭であることから、永井氏と鈴木氏は共に6期にあたる。永井氏によれば、15世紀第2四半期から16世紀第3四半期になるという。6期にはベトナムの後黎（前期）銭や莫銭は含んでいない。また、鈴木氏は、16世紀第1四半期から第2四半期であるという。問題の6期にあたるため、以下、県内の一括出土銭の様相と実年代を検討する。

5 富山県内の一括出土銭

水見市内出土の銭貨は、現在、10,196枚である。そのうち、一括出土銭は、朝日十字路遺跡、小竹遺跡、中尾ガメ山遺跡と本遺跡の4カ所で、10,152枚で、市内出土量の大半を占めている。

富山県内では、渡来銭の出土例は、12世紀後半から確認出来る。中世の集落の発展と共に、銭貨も利用され始める。現在、約6万枚以上の出土銭貨が知られている。さらに、1,000枚を超える一括大量出土銭の出土地は、15遺跡を数える。さらに、300枚以上出土の遺跡を数えると、20箇所になる。

そこで、錢貨300枚以上で、錢貨の種類がある程度わかる13遺跡（表5）について、検討してみる。

(1) 1期（最新銭が嘉定通寶・咸淳元寶）・・・2例

①中尾ガメ山遺跡（氷見市）

唐銭10%、北宋銭87%、南宋銭3%で、41種名、1,805枚で、金銭・元銭は出土していない。収納容器が検出していないので、埋納時期は不明である。最新銭は咸淳元寶（1265年初鋤）であり、1期にあたる。永井氏の13世紀第2四半期から14世紀第1四半期、鈴木氏の13世紀第4四半期から14世紀第1四半期にあたる。

②江上B遺跡（上市町）

溝で区画された中世前半の掘立柱建物から北方に離れて、珠洲壺に入った錢貨が土坑から出土した。唐銭が10%、北宋銭が89%、南宋銭1%、若干の五代十国銭を含む。37種名、559枚が出土している。壺の内面に付着していた緑青の跡から、もともと壺（一杯で約5,000枚入る）に入っていたのが、抜き取られていたと推測される。最新銭が咸淳元寶（1265年初鋤）である。珠洲壺の年代が14世紀第1四半世紀から第3四半世紀で、14世紀に埋められたと考えられる。

(2) 4期（最新銭が永楽通寶）・・・1例

①小竹遺跡（氷見市・高岡市）

小竹山城のC郭の直下、標高240mで、耕作中に発見された。詳細は不明だが、34種名、389枚出土し、容器は確認されていない。錢貨の所在は、現在不明である。唐銭12%、北宋銭73%、南宋銭2%、明銭11%で、若干の金銭・元銭を含む。最新銭が永楽通寶（1423年初鋤）であるので、4期にあたる。永井氏によれば15世紀第1四半期、鈴木氏では15世紀第2四半期から第3四半期である。出土銭のうち、ベトナムの私鋤銭である治平聖寶が出土している。この錢貨は、16世紀後半から17世紀初めに出土すること（永井2002）から、4期というより、永井氏の言う9期にあたるのであろう。

(3) 6期（最新銭が宣德通寶）・・・9例

①朝日十字路遺跡（氷見市）

珠洲壺に入った渡来銭が出土した。壺には黒漆塗りの木の蓋があったというが、現在は残っていない。壺は、14世紀後半から15世紀前半にあたる。出土銭は、中国銭6,467枚、朝鮮銭13枚、判読不明銭15枚の合計6,495枚である。中国銭は、北宋76%、明15%、唐7%、南宋2%で、五代十国銭・金銭・元銭を若干含む。朝鮮銭は朝鮮通寶だけである。全部で56銭名である。今回の出土錢貨と比較すると、北宋銭の割合が低く、明銭が多くなっている。もともと、西朴木出土の錢貨と同じ傾向を示していたのであろう。埋められた時代は、珠洲の壺の年代から考えて、15世紀であろう。

②法福寺前遺跡（字奈月町）

法福寺の門前に広がる子院の境界から出土している。越前の壺に53銭名、12,534枚が入っていた。以前、古銭商に少し売ったが、元々もう少しあったという。唐銭5%、北宋銭86%、南宋銭1%、明銭8%で、五代十国銭・金銭、朝鮮銭を若干含む。朝鮮銭は東國通寶1枚、朝鮮通寶3枚である。越前の壺は、16世紀である。

③舟見小柴遺跡（入善町）

珠洲の壺に入っている37銭名、約3,371枚が出土した。不明銭は約130枚ある。唐銭7%、北宋銭83%、南宋銭2%、明銭9%で、五代十国銭・金銭、朝鮮銭を若干含む。壺の年代は、15世紀後半であることから、15世紀後半以降に埋められたものであろう。

(4)その他

①布目沢出土（大門町）

越前の壺に入って69錢名、12,534枚出土した。唐銭7%、北宋銭81%、南宋銭2%、明銭10%で、五代十国銭、金銭、元銭、朝鮮銭、ベトナムの前黎銭を若干含む。その他、全国的に珍しい西夏銭の乾祐元寶、遼銭の大康通寶、島銭の元化通寶、県内初例の貨泉、多くの模鋳銭など特異な銭貨が含まれている。なお、新寛永の寛永通寶（1697年初鋳）が2枚含まれている。宣徳通寶と寛永通寶の間には、260年以上離れていて、越前の壺が16世紀のものであることから、寛永通寶は、混入と考えられる。もし、そうであれば6期になるが、混入でなければ、永井氏の10期以降の11期になるのであろう。

6まとめ

以上から、県内の一括出土銭と容器との関係を見てみると、時期区分の実年代に幅があることがわかる。また、残っている銭貨が完全なものでない場合が多く、読みない銭貨が多いので、正確な情報をつかむことが難しい。

今回の一括出土銭も同じ状況で、確定的なことは言えないが、最新銭が宣徳通寶から6期にあたり、実年代は15世紀第2四半期～16世紀と考えられる。さらに、朝日十字路遺跡と同じ傾向をしていると考えられることから、15世紀に埋められた可能性がある。

ところで、銭貨を埋めることについては、①備蓄銭と②埋納銭という2つの考え方がある。①は、何らかの財産保全のために埋蔵されたものというである。戦いや災害に備え緊急避難的に地中に埋めておくことで、甕・木箱・結桶・曲物などの容器に入れて埋め、将来の使用に備えて掘り返すことを想定されている。それに対して、②は呪術的・宗教的な埋納物である。城館などの境界祭祀、開発に伴う呪術的行為、地鎮行為などに銭貨を埋められるという考え方である。土地・地域と人とのつながりを銭貨に託すために供えられたというのである。しかし、銭貨の性格が①か②あるいは①と②の両方を持つかについては、各々の出土事例によって検討されなければならない。また、一般に、銭貨を埋めたものは、寺院・武士・有力農民などを想定している。

今回の西朴木フルヤチ遺跡出土周辺は、武士・有力農民は不明だが、以前に春日社があったという。時代をどこまでさかのばれるのかは不明であるが、大量出土銭の性格は、寺院の備蓄あるいは境界祭祀などが想定出来るかも知れない。水見の中世貨幣経済史のなかでの位置付けについての考察は後日にしたい。

7付記

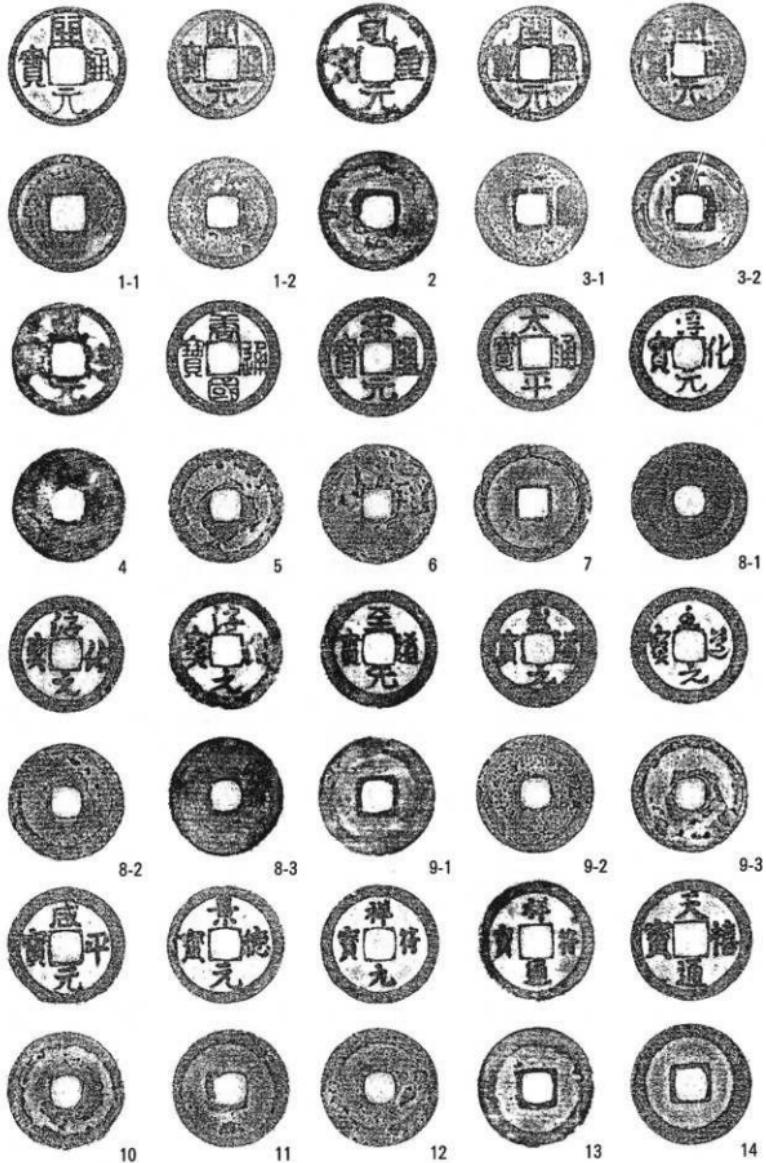
正木実氏宅に伝えられていた銭貨の一部も併せてここに紹介する。

(1)咸豐通寶（初鋳1851年） 中国清朝の咸豐通寶の大銭（當十）で、径28.62mm、厚さ1.96mm、重さ7.95gである。

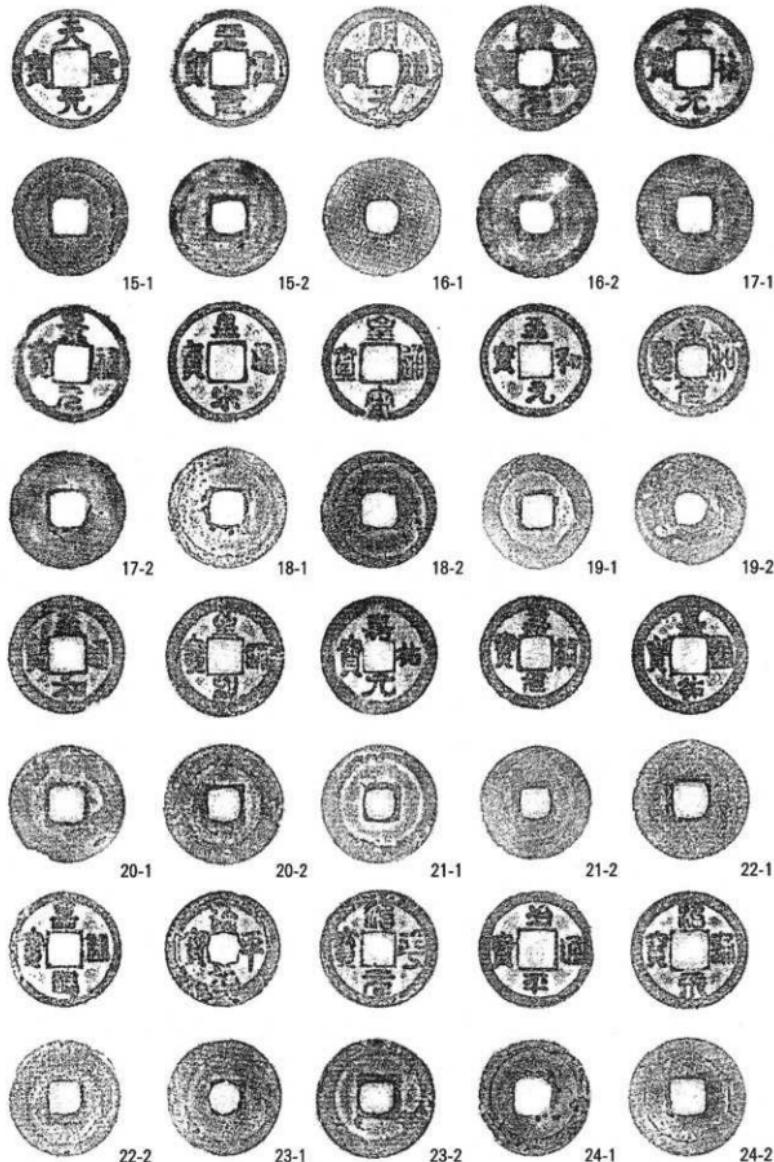
(2)常平通寶（初鋳1678年） 朝鮮王朝の小平銭と當五銭がある。前者は背文に「援」「七」に半月、径26.32mm、厚さ1.30mm、重さ4.54gである。後者は1883年初鋳で「京」「當」「九」「五」がある。径29.98mm、厚さ1.10mm、重さ4.86gである。

以上、近世の貨幣であるが、水見市では阿尾城から景興通寶が採取されており、ベトナムの後黎の後期（初鋳1740～1787年）のものである。近世の水見市内でも中国銭・朝鮮銭・ベトナム銭が流通していたことを表す資料である。

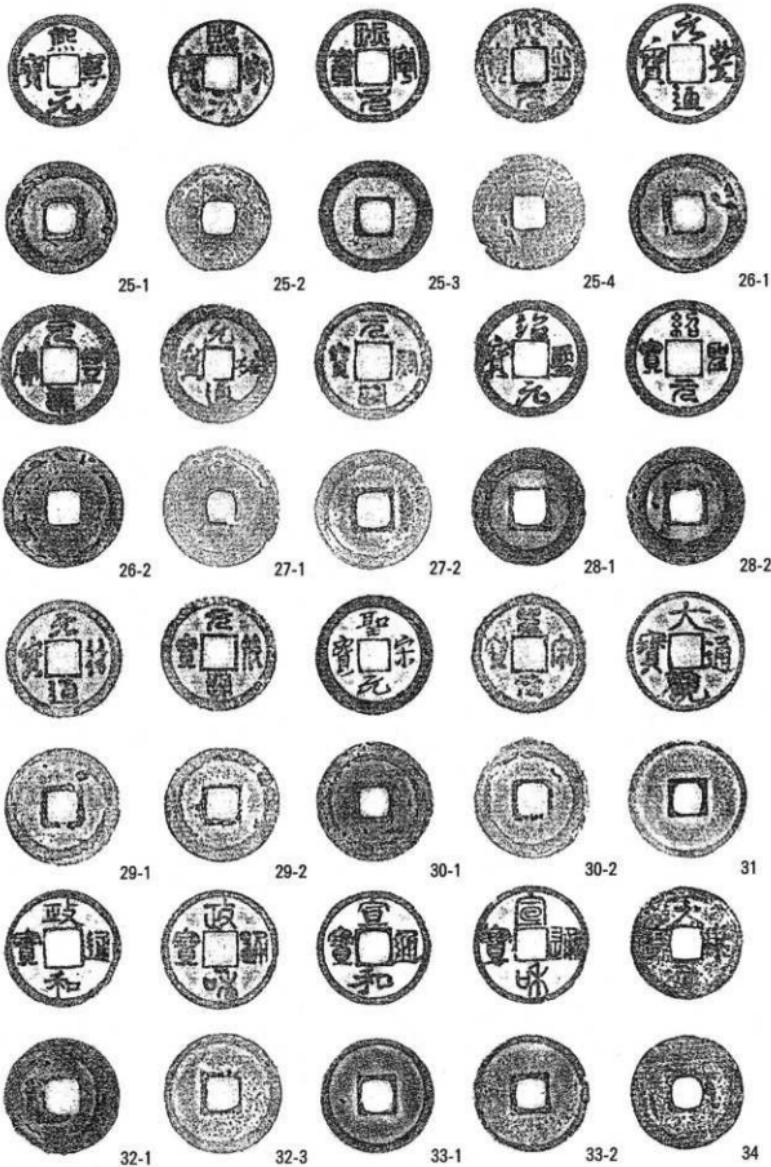
(*財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所調査第二課長)



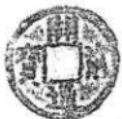
第16図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(1) S=1/1



第17図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(2) S=1/1



第18図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(3) S=1/1



35



36



37



38



39-1



39-2



40



41



42



43



39-2



44



45



46



48-1



44



45



46



47



48-1



48-2



48-2



48-3



49



51

第19図 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭(4) S=1/1

表1 西朴木フルヤチ遺跡出土の銭貨計測一覧

| 番号 | 銭名 | 銭径(mm) | 銭厚(mm) | 量目(g) | 備考 | 番号 | 銭名 | 銭径(mm) | 銭厚(mm) | 量目(g) | 備考 |
|------|------|--------|--------|-------|-----------|------|------|--------|--------|-------|---------|
| 1-1 | 開元通寶 | 24.33 | 0.92 | 1.87 | | 25-1 | 熙寧元寶 | 23.27 | 1.37 | 3.55 | |
| 1-2 | 開元通寶 | 23.08 | 1.07 | 2.53 | | 25-2 | 熙寧元寶 | 21.93 | 1.23 | 2.83 | 摩輪 |
| 2 | 乾元重寶 | 25.02 | 1.17 | 3.10 | 背下月 | 25-3 | 熙寧元寶 | 23.31 | 1.11 | 2.88 | |
| 3-1 | 開元通寶 | 23.68 | 1.60 | 3.74 | 背右「葉」、背上月 | 25-4 | 熙寧元寶 | 23.70 | 1.44 | 3.31 | |
| 3-2 | 開元通寶 | 24.40 | 1.65 | 4.48 | 背日「落」 | 26-1 | 元豐通寶 | 24.82 | 1.31 | 2.93 | |
| 4 | 乾德元寶 | 23.40 | 1.48 | 3.25 | | 26-2 | 元豐通寶 | 25.11 | 1.21 | 4.02 | |
| 5 | 唐國通寶 | 23.60 | 1.14 | 3.02 | | 27-1 | 元祐通寶 | 24.80 | 1.15 | 3.30 | |
| 6 | 宋通元寶 | 24.64 | 1.10 | 3.43 | | 27-2 | 元祐通寶 | 24.42 | 1.30 | 3.54 | |
| 7 | 太平通寶 | 24.38 | 1.29 | 3.17 | | 28-1 | 紹聖元寶 | 24.27 | 1.11 | 2.91 | |
| 8-1 | 淳化元寶 | 24.18 | 1.02 | 2.82 | | 28-2 | 紹聖元寶 | 24.67 | 1.25 | 3.57 | 背左星 |
| 8-2 | 淳化元寶 | 24.45 | 1.19 | 3.50 | | 29-1 | 元符通寶 | 23.38 | 1.40 | 3.47 | |
| 8-3 | 淳化元寶 | 24.60 | 1.10 | 3.04 | | 29-2 | 元符通寶 | 23.89 | 1.21 | 3.05 | |
| 9-1 | 至道元寶 | 24.39 | 1.23 | 3.37 | | 30-1 | 聖宋元寶 | 24.64 | 1.29 | 3.84 | |
| 9-2 | 至道元寶 | 24.62 | 1.09 | 3.39 | | 30-2 | 聖宋元寶 | 24.35 | 1.60 | 4.20 | |
| 9-3 | 至道元寶 | 24.09 | 1.31 | 3.53 | | 31 | 大觀通寶 | 24.69 | 1.48 | 4.08 | |
| 10 | 咸平元寶 | 24.16 | 1.15 | 3.25 | | 32-1 | 政和通寶 | 24.43 | 1.10 | 2.70 | |
| 11 | 景德元寶 | 24.34 | 1.25 | 3.30 | | 32-2 | 政和通寶 | 23.55 | 1.24 | 3.17 | |
| 12 | 祥符元寶 | 24.28 | 1.10 | 3.24 | | 33-1 | 宣和通寶 | 24.43 | 1.10 | 2.70 | |
| 13 | 祥符通寶 | 24.35 | 1.28 | 3.05 | | 33-2 | 宣和通寶 | 24.51 | 1.41 | 3.73 | |
| 14 | 大觀通寶 | 25.18 | 1.11 | 3.31 | | 34 | 大康通寶 | 23.37 | 1.22 | 3.22 | |
| 15-1 | 大聖元寶 | 24.52 | 1.19 | 3.07 | | 35 | 淳熙元寶 | 23.93 | 1.35 | 3.12 | 背「十五」 |
| 15-2 | 大聖元寶 | 24.36 | 1.18 | 3.10 | | 36 | 紹熙元寶 | 24.07 | 1.34 | 2.83 | 背「三」 |
| 16-1 | 明道元寶 | 24.02 | 1.26 | 3.43 | | 37 | 慶元通寶 | 23.97 | 1.22 | 2.93 | 背「二」 |
| 16-2 | 明道元寶 | 25.63 | 1.27 | 3.58 | | 38 | 開禧通寶 | 23.93 | 1.21 | 3.47 | 背「二」 |
| 17-1 | 景祐元寶 | 24.94 | 1.13 | 3.02 | | 39-1 | 嘉定通寶 | 24.22 | 1.22 | 3.56 | 背「二」 |
| 17-2 | 景祐元寶 | 24.56 | 1.20 | 3.40 | | 39-2 | 嘉定通寶 | 23.51 | 1.34 | 3.56 | 背「十四」 |
| 18-1 | 皇宋通寶 | 23.99 | 1.10 | 3.04 | | 40 | 紹定通寶 | 23.57 | 1.33 | 3.56 | 背「三」 |
| 18-2 | 皇宋通寶 | 24.48 | 1.24 | 3.54 | | 41 | 嘉熙通寶 | 24.24 | 1.36 | 3.12 | 背「四」 |
| 19-1 | 至和元寶 | 23.48 | 1.34 | 3.32 | | 42 | 淳祐元寶 | 23.40 | 1.13 | 2.97 | |
| 19-2 | 至和元寶 | 23.48 | 1.35 | 3.35 | | 43 | 景定元寶 | 23.99 | 1.14 | 2.84 | 背「元」 |
| 20-1 | 至和通寶 | 23.53 | 1.33 | 3.51 | | 44 | 咸淳元寶 | 22.96 | 1.07 | 2.71 | 背「四(か)」 |
| 20-2 | 至和通寶 | 24.44 | 1.07 | 3.09 | | 45 | 正隆元寶 | 23.70 | 1.25 | 2.99 | |
| 21-1 | 嘉祐元寶 | 23.45 | 1.16 | 3.33 | | 46 | 大定通寶 | 25.00 | 1.29 | 3.22 | |
| 21-2 | 嘉祐元寶 | 25.20 | 1.21 | 3.52 | | 47 | 大中通寶 | 23.02 | 1.13 | 2.58 | |
| 22-1 | 嘉祐通寶 | 22.91 | 1.29 | 3.03 | | 48-1 | 洪武通寶 | 24.23 | 1.31 | 3.46 | 摩輪 |
| 22-2 | 嘉祐通寶 | 24.22 | 1.18 | 2.95 | | 48-2 | 洪武通寶 | 22.61 | 1.51 | 3.73 | |
| 23-1 | 治平元寶 | 23.87 | 1.38 | 3.36 | 内郭ずれる | 48-3 | 洪武通寶 | 24.52 | 1.67 | 3.94 | 背上「浙」 |
| 23-2 | 治平元寶 | 24.40 | 1.44 | 4.04 | | 49 | 永樂通寶 | 25.30 | 1.34 | 3.83 | |
| 24-1 | 治平通寶 | 24.29 | 1.24 | 3.08 | | 50 | 宣德通寶 | 25.24 | 1.23 | 3.63 | |
| 24-2 | 治平通寶 | 24.23 | 1.21 | 2.97 | | 51 | 朝鮮通寶 | 23.91 | 1.35 | 3.46 | 一部欠け |

番号は、第16図～第19図の番号に対応する。

咸豐通寶（當十錢）



常平通寶（小平錢）



常平通寶（當五錢）



第20図 正木実家に伝わる銭貨 (S=1/1)

表2 西朴木フルヤチ遺跡の出土銭貨一覧

| 錢名 | 区分 | 王朝 | 初歸年 | 書体 | 枚数 | 合計 | 錢種 | | | 区分 | 王朝 | 初歸年 | 書体 | 枚数 | 合計 |
|---------|----|----|------|----|-----|-----|-----|------|---|------|----|-----|-----|-----|-------|
| | | | | | | | 中國 | 錢 | 國 | | | | | | |
| 1 開元通寶 | 唐 | | 621 | 篆 | 104 | 104 | 25 | 熙寧元寶 | 宋 | 1068 | 楷 | | 79 | 74 | 153 |
| 2 乾元重寶 | " | | 758 | 篆 | 3 | 3 | 8 | 元祐通寶 | " | 1078 | 篆 | | 90 | 64 | 154 |
| 3 乾元重寶 | 開鑄 | | 845 | 篆 | 8 | 8 | 26 | 元祐通寶 | " | 1086 | 篆 | | 60 | 55 | 115 |
| 4 乾元重寶 | 剪鋟 | | 919 | 篆 | 1 | 1 | 2 | 元祐通寶 | " | 1094 | 篆 | | 26 | 34 | 60 |
| 5 唐祐通寶 | 南唐 | | 969 | 篆 | 2 | 2 | 13 | 紹聖元寶 | " | 1098 | 篆 | | 17 | 17 | 44 |
| 6 宋祐通寶 | 北宋 | | 960 | 篆 | 4 | 13 | 28 | 元符通寶 | " | 1101 | 篆 | | 11 | 11 | 22 |
| 7 太平通寶 | " | | 976 | 楷 | 5 | 9 | 29 | 元符通寶 | " | 1107 | 楷 | | 28 | 50 | 78 |
| 8 淳化元寶 | " | | 980 | 楷 | 3 | 1 | 30 | 聖宋元寶 | " | 1111 | 楷 | | 9 | 25 | 34 |
| 9 至道元寶 | " | | 985 | 楷 | 8 | 12 | 27 | 聖宋元寶 | " | 1119 | 篆 | | 16 | 16 | 50 |
| 10 懿聖元寶 | " | | 998 | 楷 | 7 | 7 | 31 | 大觀通寶 | " | 1114 | 篆 | | 11 | 11 | 22 |
| 11 熙寧元寶 | " | | 1004 | 楷 | 26 | 26 | 32 | 政和通寶 | " | 1120 | 楷 | | 4 | 4 | 9 |
| 12 熙寧元寶 | " | | 1008 | 楷 | 16 | 16 | 35 | 淳熙元寶 | " | 1123 | 楷 | | 5 | 5 | 10 |
| 13 祥符通寶 | " | | 1008 | 楷 | 23 | 23 | 94 | 大觀通寶 | " | 1127 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| 14 祥符通寶 | " | | 1017 | 楷 | 23 | 23 | 71 | 淳熙元寶 | " | 1130 | 楷 | | 3 | 3 | 6 |
| 15 天聖元寶 | " | | 1023 | 楷 | 47 | 24 | 71 | 紹熙元寶 | " | 1136 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| 16 明道元寶 | " | | 1032 | 楷 | 1 | 37 | 37 | 聖宋通寶 | " | 1145 | 楷 | | 2 | 2 | 4 |
| 17 景祐元寶 | " | | 1034 | 篆 | 1 | 2 | 38 | 明道元寶 | " | 1155 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| 18 皇宋通寶 | " | | 1038 | 篆 | 6 | 17 | 23 | 嘉定通寶 | " | 1167 | 楷 | | 8 | 8 | 16 |
| 19 至和元寶 | " | | 1054 | 楷 | 100 | 64 | 164 | 紹熙通寶 | " | 1178 | 楷 | | 2 | 2 | 4 |
| 20 元祐通寶 | " | | 1054 | 篆 | 6 | 16 | 42 | 淳祐元寶 | " | 1181 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| 21 紹祐元寶 | " | | 1056 | 楷 | 10 | 2 | 4 | 大正通寶 | " | 1190 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| 22 紹祐通寶 | " | | 1056 | 篆 | 2 | 2 | 46 | 大中通寶 | " | 1201 | 楷 | | 2 | 2 | 4 |
| 23 治平元寶 | " | | 1064 | 楷 | 11 | 16 | 47 | 洪武通寶 | " | 1208 | 楷 | | 14 | 14 | 104 |
| 24 治平元寶 | " | | 1064 | 篆 | 5 | 16 | 48 | 洪武通寶 | " | 1218 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | 26 | 41 | 49 | 永樂通寶 | " | 1228 | 楷 | | 104 | 104 | 1,470 |
| | | | | | 8 | 18 | 51 | 朝鮮錢 | " | 1237 | 楷 | | - | - | 28 |
| | | | | | 6 | 6 | 9 | 明錢 | " | 1241 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | 3 | 3 | 1 | 金 | " | 1250 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 聖宋通寶 | " | 1265 | 楷 | | 2 | 2 | 4 |
| | | | | | | | | 正隆元寶 | " | 1275 | 楷 | | 2 | 2 | 4 |
| | | | | | | | | 大定通寶 | " | 1285 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 紹興通寶 | " | 1295 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 建炎通寶 | " | 1305 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 開禧通寶 | " | 1315 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 嘉定通寶 | " | 1325 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1335 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 紹熙通寶 | " | 1345 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1355 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 嘉定通寶 | " | 1365 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1375 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 紹熙通寶 | " | 1385 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1395 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 嘉定通寶 | " | 1405 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1415 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 紹熙通寶 | " | 1425 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1435 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 嘉定通寶 | " | 1445 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1455 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 紹熙通寶 | " | 1465 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1475 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 嘉定通寶 | " | 1485 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1495 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 紹熙通寶 | " | 1505 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1515 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 嘉定通寶 | " | 1525 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | 淳祐通寶 | " | 1535 | 楷 | | 1 | 1 | 2 |

表3 西朴木フルヤチ遺跡出土銭貨の銭種構成

| 国名 | 王朝名 | 出土枚数 | 構成比% | 水見市内出土 | |
|-----|-----|-------|-------|--------|-------|
| | | | | 出土枚数 | 構成比% |
| 中 国 | 唐 | 115 | 8.0 | 759 | 7.55 |
| 前 蜀 | | 1 | 0.1 | 2 | 0.02 |
| 南 唐 | | 2 | 0.1 | 15 | 0.15 |
| 北 宋 | | 1,175 | 81.6 | 7,890 | 78.53 |
| 遼 | | 1 | 0.1 | 1 | 0.01 |
| 南 宋 | | 23 | 1.6 | 209 | 2.08 |
| 金 | | 3 | 0.2 | 21 | 0.21 |
| 明 | | 121 | 8.4 | 1,136 | 11.31 |
| 朝 鮮 | 朝 鮸 | 1 | 0.1 | 14 | 0.14 |
| 合 計 | | 1,442 | 100.1 | 10,047 | 100 |

第21図 西朴木フルヤチ遺跡出土銭貨の銭種構成

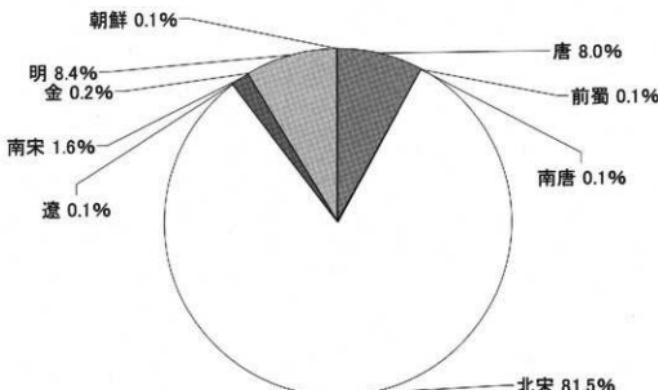


表4 西朴木フルヤチ遺跡出土銭貨のベストテン

| 銭貨番号 | 銭名 | 王朝 | 初鑄年 | 合計 | 構成比% | 水見市内での出土順位 | 県内での出土順位 | 全国出土352万枚での順位 |
|------|------|----|------|-----|------|------------|----------|---------------|
| 1 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 164 | 19.2 | 1 | 1 | 1 |
| 2 | 元祐通寶 | 北宋 | 1078 | 154 | 18.0 | 2 | 2 | 2 |
| 3 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 153 | 17.9 | 3 | 3 | 3 |
| 5 | 元祐通寶 | 北宋 | 1086 | 115 | 13.5 | 5 | 4 | 4 |
| 6 | 開元通寶 | 唐 | 621 | 104 | 12.2 | 6 | 6 | 5 |
| 4 | 永樂通寶 | 明 | 1408 | 104 | 12.2 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 天聖元寶 | 北宋 | 1023 | 71 | 8.3 | 7 | 7 | 7 |
| 8 | 紹聖元寶 | 北宋 | 1094 | 60 | 7.0 | 8 | 8 | 8 |
| 10 | 政和通寶 | 北宋 | 1111 | 50 | 5.8 | 10 | 10 | 9 |
| 9 | 聖宋元宝 | 北宋 | 1101 | 44 | 5.1 | 9 | 9 | 10 |
| 合計 | | | | 855 | 100 | | | |

表5 富山県内出土の主な一括大量出土銭一覧

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 遺跡の性格 | 立地 | 出土遺構 | 時期区分 | 銭名 | 枚数 | 最古銭 | 収納容器 | 出典 | 備考 |
|----|-------------------|--------------------|-------------|-----------|------|------|----|--------|------|------|------------------------------------|--|
| 1 | 江上B 遺跡 | 中新川郡 上市町 江上 | 村落 | 平地 | 土坑 | 1期 | 37 | 559 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 「北陸自動車道調査 報告」-上市町土器・石器 編-1 | SK106から37種559枚、S K88から北宋25、SD70 から7 |
| 2 | 中尾ガメ 山遺跡 | 氷見市 中尾 | 不明 | 山裾 | 單孔 | 1期 | 41 | 1,805 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔中尾古錢鑄造跡〕『水 貝春秋』第2号 | 昭和56年ため池工事中、 30枚単位で結ぶ 経緯、か、トナムの治平 通寶を含む |
| 3 | 小竹遺跡 | 氷見市 小竹 | 小竹山城 の曲輪 | 山頂部 付近 | 單孔 | 4期 | 34 | 389 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔昭和25年度研究調査報 告集〕 | 昭和25年度研究調査報 告集を含む |
| 4 | 西林木 フルーチ 遺跡 | 氷見市 西林木 | 不明 | 丘陵先端 | 單孔 | 6期 | 51 | 1,470 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔中尾古錢鑄造跡〕『水 貝春秋』第2号 | 昭和67年水道工事中出土 昭和67年不時発見 |
| 5 | 朝日十字 路遺跡 | 氷見市 朝日丘 | 不明 | 平地 | 單孔 | 6期 | 56 | 6,488 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 2002「氷見市史編さん委員会 委員会」 | 昭和67年水道工事中出土 大正2年作業中出土 |
| 6 | 法福寺前 遺跡 | 下新川郡 字奈月町 明日 | 寺院関連 | 各地 | 單孔 | 6期 | 53 | 12,534 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔追録〕奈月町史 〔史編〕1989、富山考古学 会再調査 | 大正12年作業中出土 大正12年作業中出土 |
| 7 | 明石A 遺跡 | 下新川郡 朝日町 明石 | 不明 | 丘陵斜面 | 單孔 | 6期 | 56 | 6,453 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔母見発掘の古錢整理報 告書〕 | 昭和48年工事中出土 昭和47年は場整備工事中 出土 |
| 8 | 古戸出 | 高岡市 古戸出 | 不明 | 平地 | 單孔 | 6期 | 48 | 6,072 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔母見発掘の古錢整理報 告書〕 | 60枚撲出、その他 10kg、昭和47年工事中 出土 |
| 9 | 舟見小 糸遺跡 | 下新川郡 人美町 舟見 | 不明 | 平地 | 單孔 | 6期 | 37 | 3,371 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔母見発掘の古錢整理報 告書〕 | 60枚撲出、その他 10kg、昭和47年工事中 出土 |
| 10 | 中仙目 | 富山市 中布目 | 不明 | 平地 | 單孔 | 6期 | 37 | 3,200 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔母見発掘の古錢整理報 告書〕 | 60枚撲出、その他 10kg、昭和47年工事中 出土 |
| 11 | 各頭寺前 遺跡 | 婦負郡 婦負町 等町 | 寺院関連 | 台地 | 單孔 | 6期 | 52 | 2,390 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔母見発掘の古錢整理報 告書〕 | 60枚撲出、その他 10kg、昭和47年工事中 出土 |
| 12 | 香爐寺 古宮遺跡 | 西礪波郡 福光町 香爐寺 | 寺院関連 | 山麓 | 單孔 | 6期 | 48 | 1,388 | 開元通寶 | 珠洲壺 | 〔母見発掘の古錢整理報 告書〕 | 60枚撲出、その他 10kg、昭和47年工事中 出土 |
| 13 | 布目沢 | 射水郡 大門町 布目沢 | 不明 | 平地 | 單孔 | 9期か | 69 | 22,938 | 貨泉 | 珠洲壺 | 〔母見発掘の古錢整理報 告書〕 | 60枚撲出、その他 10kg、昭和47年工事中 出土 |

おわりに

石動山に関連する文化財を中心とした、市北部地域の丘陵地区分布調査をひとまず終了する。今回の調査で手引きとなつたのは、20年前の調査の成果報告であった。20年前に確認された場所を訪ねようとするものの、山道が途絶え、草木に埋もれていて、発見に手間取ることが少なからずあった。20年間手つかずで保護されてきたと言えばそれまでであるが、地域の人々にさえ忘れられていくようであるならば、死蔵と言わざるを得ない。山中に埋もれたこれら文化財をいかに活用するか、今後の大きな課題である。

調査では幸い新たな知見も多かった。主要なものについては、測量・実測を行い、本書に掲載した。今後の石動山研究の参考になれば幸いである。

一方、あわせて収録した西朴木地区の資料についても、貴重な知見である。何よりも地元の方から情報を受けたのがありがたかった。石動山以外にも氷見市には多くの中世の痕跡が所在する。来年度以降もこれらの発見・報告に努めたい。

参考文献（宮田進一氏の分を含む）

- 鹿島町 1986 『鹿島町史』石動山資料編
- 葛飾区郷土と天文の博物館編 2000 『埋められた渡来銭』
- 小境卓治 1994 「弘源寺本堂図面と大窯大工」『越中二上山と国泰寺』桂書房
- 児島清文 1962 『水見市地名考』
- 児島清文 1981 「垂姫崎考」『水見春秋』第4号
- 児島清文 1985 「再考・相浦村」『水見春秋』第12号
- 児島清文・伏脇紀夫編 1988 『應饗雜記（上）』桂書房
- 児島清文・伏脇紀夫編 1990 『應饗雜記（下）』桂書房
- 佐伯有義編 1924 『富山県神社祭神御事歴』富山県神職会
- 清水一布 1960 『灘浦誌』
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 石動山文化財調査団・水見市教育委員会 1989 『国指定史跡石動山文化財報告書』
- 高森邦男 1986 「富山氏の領国越中と棟別銭収取について」『富山史壇』第91号
- 寺岡清 2001 「長板地区の墓標とその変遷－墓地調査から」『水見春秋』第44号
- 寺岡清 2002 a 「長板地区墓地調査報告－集合墓地－」『水見春秋』第45号
- 寺岡清 2002 b 「長板地区墓地調査報告－大橋周平家の墓山墓地－」『水見春秋』第46号
- 寺岡清 2003 「長板地区的板石塔婆」『水見春秋』第47号
- 戸簾暢宏・橋本正春 2003 『富山県の経塚』『富山大学考古学研究室論集 蝶氣樓』六一書房
- 富山県教育委員会 1981 『富山県歴史の道調査報告書－水見・能登道－』
- 富山県立水見高校歴史クラブ 1955 『石動山の研究』
- 富山市教育委員会 1978 『富山市塙根経塚発掘調査報告書』
- 永井久美男編 1996 「最新銭による一括理納銭の時期区分」『中世の出土銭 楠遺Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 2002 『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 橋口定志 1999 「銭を埋めること」『越境する貨幣』青木書店
- 水見市 1998 『水見市史』3 資料編一 古代・中世・近世（一）
- 水見市 1999 『水見市史』9 資料編七 自然環境
- 水見市 2000 『水見市史』6 資料編四 民俗・神社・寺院
- 水見市 2002 『水見市史』7 資料編五 考古
- 水見市教育委員会 1984 『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』
- 水見市教育委員会 1985 『富山県水見市蔽田薬師中世墓発掘調査報告書』
- 水見市教育委員会 1997 『朝日貝塚Ⅲ』
- 水見市教育委員会 2000 『協方谷内出中世墓』
- 水見市教育委員会 2003 『図説 水見の歴史・民俗』
- 水見市立博物館 1984 『石動山信仰文化展』
- 水見市立博物館 1985 『水見の石造美術』
- 北陸中世土器研究会 1997 『中・近世の北陸』桂書房
- 横澤信生 1994 「越中鞍川氏考」『富山史壇』第113・114号
- 横澤信生 2003 「竺山和尚教書之状」及び鞍川氏について『富山史壇』第141号
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

図 版

図版1 分布調査の成果(1)



平沢道の様子



平沢神社の不動明王坐像



平沢地区ホウバヤシキ



平沢道道標



平沢一里塚遺跡



平沢一里塚遺跡の立石



平沢一里塚遺跡西下の石造物



平沢道「ア」塔

図版2 分布調査の成果(2)



長坂ヤマダの墓



長坂落合中世墓の五輪塔など



長坂行入塚の立石



長坂行入塚の板石塔婆



長坂落合中世墓対岸の小祠



數田見田庵の古道



數田見田庵村社



白川オオサンジャの石造物

図版3 分布調査の成果(3)



白川|オオサンジャの石造物



五十谷川南側寺院伝承地近くの滝



白川五社の宮



八代仙道近くの岩屋跡か



中波地区旧火葬場と共同墓地



中波共同墓地の石造物

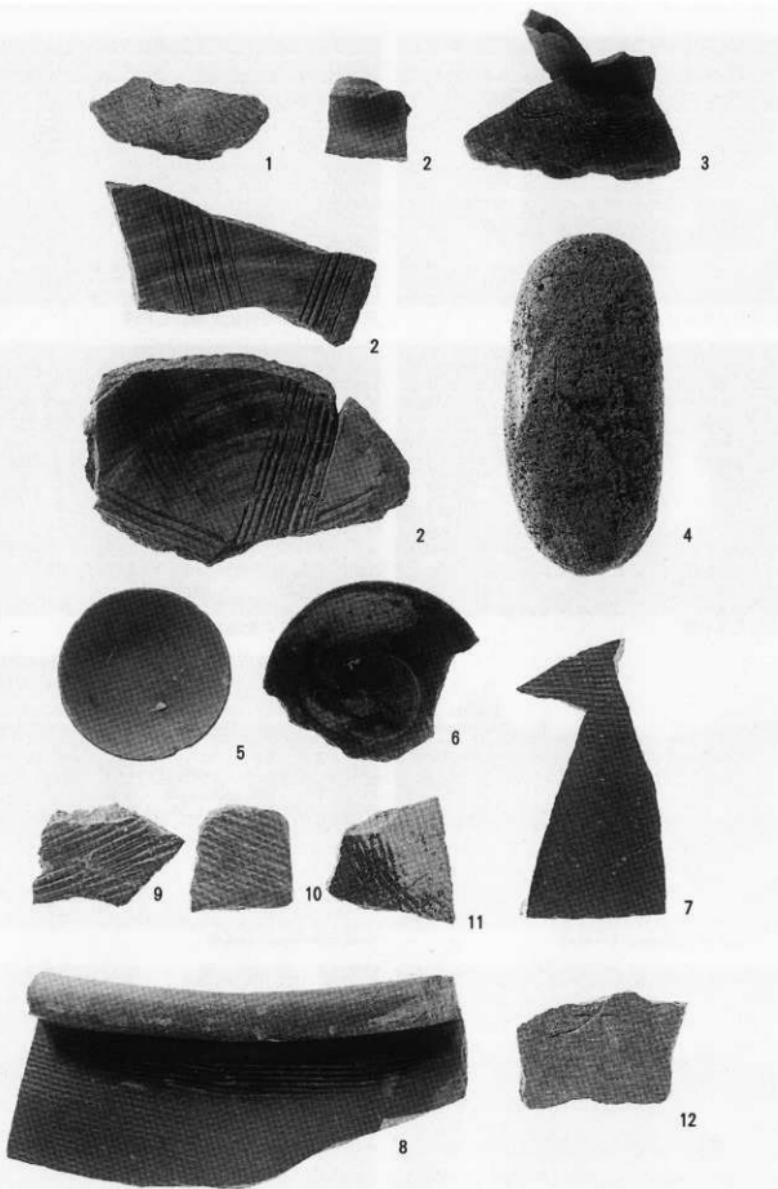


中波共同墓地の相輪



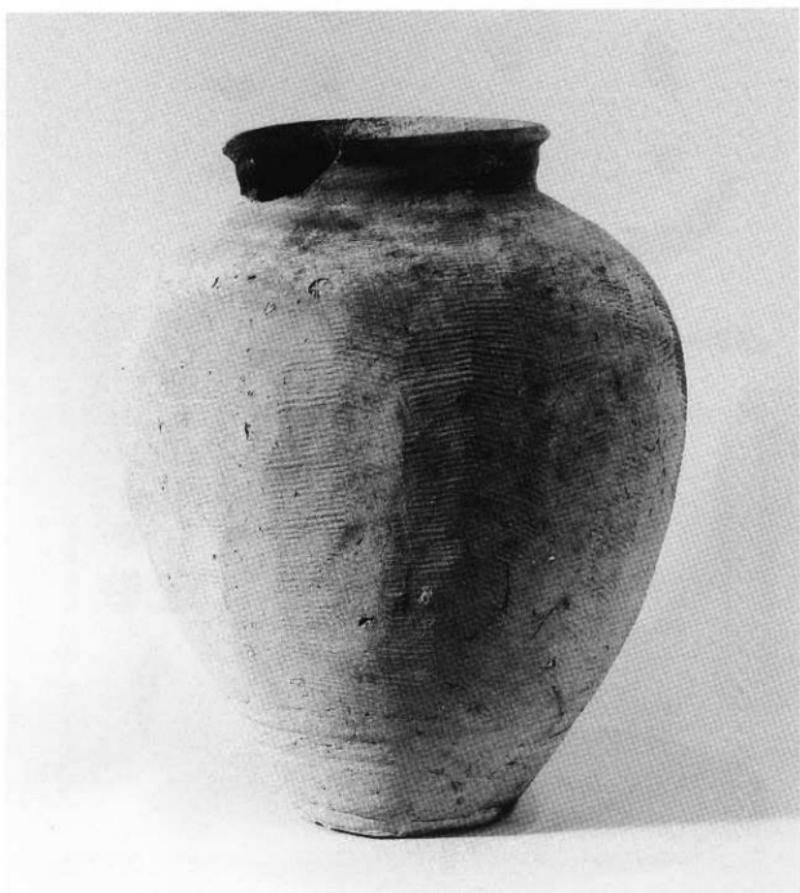
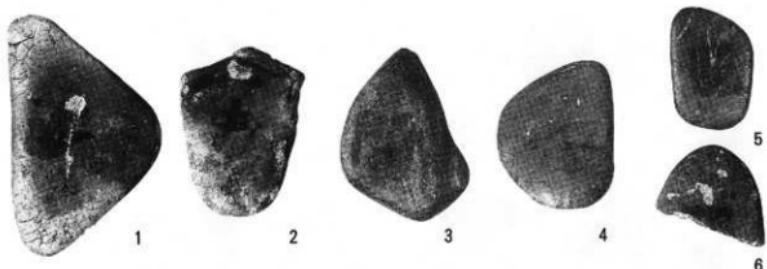
千人塚

図版 4
採集遺物(1)



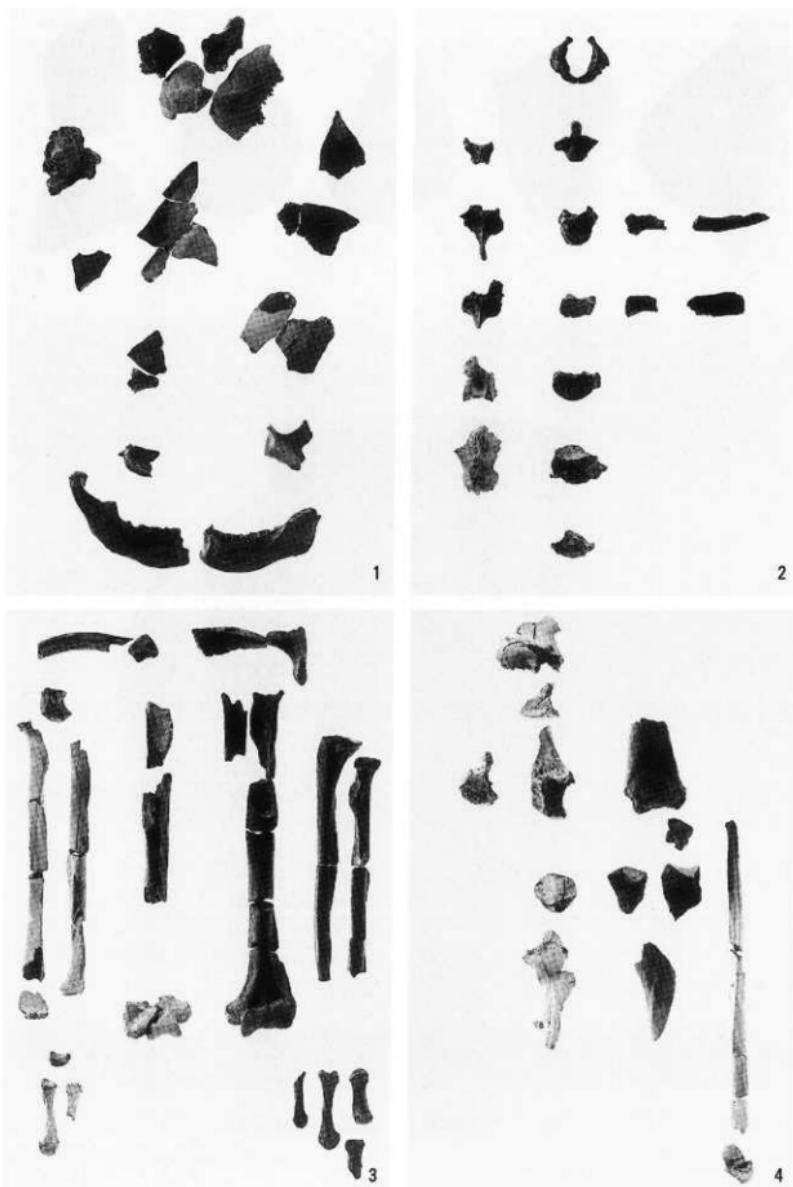
1：千人塚，2・3：長坂落合中世墓，4：平沢一里塚遺跡，5・6：白川薬師堂，7・8：西朴木
ドウガヤチ遺跡，9～12：西朴木ジョウコウジ遺跡

図版 5 採集遺物(2)



1~6:平沢一里塚遺跡(1/1), 7:西朴木ドウガヤチ遺跡

図版 6 出土人骨



西朴木ドウガヤチ遺跡出土主要焼骨 1：頭蓋骨、2：体幹骨、3：上肢骨、4：下肢骨

平成16年3月25日 印刷
平成16年3月31日 発行

水見市埋蔵文化財調査報告第40冊
水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)IV

編集・発行 水見市教育委員会
〒935-0016 富山県水見市本町4番9号
TEL 0766-74-8215 (生涯学習課)

印刷 富山スガキ株式会社